
ヒナギク × オリキャラ 物語

哲さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒナギク×オリキャラ 物語

【Nコード】

N5923I

【作者名】

哲さん

【あらすじ】

完全無欠スーパー美少女の桂 ヒナギク。
彼女は白皇学院の生徒会長。

ある日いつも通り、仕事をこなし帰宅しようとする中、
転入生荒木 ハレタと遭遇。

ひよんなことから知り合った2人・・・

彼らの恋とは・・・

第1話 マンデーナイトフィーバー（前書き）

初投稿で何かと不憫かも知れませんが、
読んでもらえると嬉しいです。

それでは記念すべき第1話ご覧ください。

第1話 マンデーナイトフィーバー

「キンコンカンコン」

白皇学院に下校のチャイムが響く。

静かになった学校で

一人黙々と日が落ちるまで作業をこなす少女がいた。

「これで今日の分は終わりね」

ピンクの髪がひとときわ輝く、

彼女の名は桂 ヒナギク。

白皇学院の生徒会長である。

仕事を終えた彼女は、

生徒会室を後にした。

「もうすっかり暗いわね」

それもそのはず、もう10を時すぎていた。
外に出て校門までを歩いてると・・・

カサカサ・・・カサカサ・・・

と音が聞こえた。

びっくりして彼女はそこに振り向いた。

そこには顔がはっきり見えないが男の子がいることがわかったようだ。

「・・・あなた何してるの？」

それがこの2人の出会いであつたのだろう。

まず誰もいないと思ってたであろう、
少年はびっくりしていた。
そして・・・

「明日から世話になる学校を
見物しにきただけさ。」

そー言っあんだこそ何やってんだ？」

「あんだじゃないわ。」

私は桂 ヒナギク、白皇学院の生徒会長よ。
今まで生徒会の仕事をやっていたのよ」
冷静に答えるヒナギク。

「こんな時間までやってるってことは
そーとー大変なんだな」
まあ頑張れよ会長さん」

嬉しかったのか、
ヒナギクは顔を逸らした。

「そー言っあなたの名前は？」

世話になるってことは
転入生ってことよね？

なら、学校案内くらいしてあげてもいいわよ・・・？」

照れても言うことはちゃんと言う。

「俺は荒木 ハレタ。会長さんの言う通り、
転入生ってやつさ。

てか、ここの敷地広すぎて何がなんだからよw
案内してもらえると助かるよ」

素直にハレタは答え、

「ヒナギクでいいわ。

じゃあハレタ君私について来て」

「ありがとな、ヒナギク」

夜の学校に踏み出したのであった。

『この出会いが運命を変えていったことを2人はまだ知らない』

第1話 マンデーナイトフィーバー（後書き）

最初に言ったとおり、変なことか

アドバイス等ありましたら、

教えていただけると幸いです。

続けていくつもりなので読んでくれると嬉しいです。

第2話 鯉・・・？（前書き）

へたくそですけど、最後まで読んでいただけたらと思います。

短いですが、第2話です。

第2話 鯉・・・？

学校案内が一通り終わって、
2人はいま生徒会室で一段落。

「すっかり遅くなったなー」

ハレタが時計を見るともう11時。

「付き合ってもらったし、
家まで送ってくよ」

ヒナギクは、

「ハレタ君が帰るのが遅くなるから大丈夫よ
それに親御さんたちが心配すると思うわ」

と会長らしく否定。

なぜか沈黙するハレタ…

「どうしたの？」

とヒナギクは問う。

「…なんでもない、
それより俺に気を使わなくていいから
送ってくよ」

（今表情が暗くなった・・・？）

ヒナギクはひそかに思う。

（親を見られたくねえ・・・w）

ハレタはこう思っていたw

「ありがとう、素直に送ってもらったw
一人じゃ寂しいしね」

気になるけど、今はその気持ちをしまった。

「じゃ行くか！

ヒナギクのおかげで学校の中もわかったことだしな」

とハレタは言い、2人で生徒会室を後にした。

「

なあヒナギク、毎日こんな遅くまで頑張ってたのか？」

帰り道を歩きながら喋りだす2人。

「生徒会の仕事が多ければこんなものよ？

まあ他にも生徒会の生徒はいるんだけど、

基本的に私一人だからw」

笑いながらも、すごく大変そうだとハレタは思う。
そこで、

「俺、生徒会に入るわ

一人で頑張っても楽しくないだろ？

俺もヒナギクに協力させてや」

ハレタはヒナギクの目を見て言う。

マジなようだ。

「レポートとか、地味な仕事もたくさんあるわよ？
いいの？」

「構わねーよ、女の子がこんなに頑張ってるんだ
男として、動かないとなw」

笑顔でハレタは答える。

ヒナギクは、嬉しいようで、素直にありがとうと答えた。

「ハレタ君って・・・いい人ね」
ポツリとつぶやく。

「んー？」

ヒナギクの力になりたいと思ったただけだぜ^^
まあかつこつけさせてくれやw」

ぽおー

（鳴き声とかじゃないよお）

紅くなるヒナギク…

そんなこっちやで歩いていると…

「私の家、この先だからもういいわ、
送ってくれてありがとう。」

転入生といち早く打ち解けてよかった
じゃあ、また明日ね
ハレタ君！！」

「うん、またなあ」

と手を振るハレタ。

一人家へと歩き出すハレタ。

「てゅーか…」

俺んちとヒナギくんち近いなw」

ヒナギクの家はさっきのこの先で

ハレタの家はさっきのここを右折してすぐのところだったのだ…

「これでいつでも送ってやれるな」
とひそかに思うのであったw

家に帰るなり、眠かったのか
風呂に入ってテレビを見ていたら
気がついたら寝てしまったようだ…

次の日から波乱・・・
きっとハレタは思いもしなかったであろう・・・

次回に続きますよーw

第2話 鯉・・・？（後書き）

アドバイス・指摘・感想などありましたらぜひ教えてください。

あとナレーションは作者ですが、次話から
主にハレタのナレーションで話をすすめていくことにします。

変な文になることもあると思いますが
書いていくので見ていってください。

第3話 恋しちゃ、いやいや（前書き）

話をハレタ視点で進めていきます。

多分変ですが、第3話です。

見てってください。

第3話 恋しちゃ、いやいや

ジリリリリリリ

目覚ましが鳴り、俺は起き上がった。
時計をみると…

「ゲツ！

7時50分！？初日から遅刻なんてシャレになんねえw

姉ちゃん・・・何でおこしてくれなかったんだー！！！！」

俺の家には現在

俺と姉ちゃんしか住んでいない。

父さん、母さんは揃って海外で仕事をしている。

んな訳で家には俺と

2歳上の姉ちゃんしかいない。

まあ家庭事情はほつといて、

とにかく学校行かなきゃ！

支度をすませ、俺は疾風のごとく家をでた。

とにかく急いだ。

頑張って走って肩で呼吸をしていた。

頑張りは報われ、なんとか遅刻せずに学校にいけることができた。
校長室にて、女の先生に

「荒木君、君は1-Fだから私のクラスよ。
私は桂雪路。まあ残り二ヶ月ほどだけどうぞしね」

桂・・・？

確か、ヒナギクも桂じゃなかったっけ？
と疑問を思いつつも
俺は桂先生について行き、
教室の前で呼ばれるのを待った。

ざわついて何言ってるか聞こえなかったけど、先生に呼ばれたのははっきりわかった。

ドアを開けて教室に入る。

いろんな奴がいるなあって思っ
て見渡していたらそこには・・・

「ヒナギク！」

思わず考える前に声が出た。

「なんだ同じクラスだったのねw」

ヒナギクもびっくりしているようだった。

「ええとじゃあ、荒木君はヒナギクの横の空いてる席に座って」
あっさり隣の席になった俺とヒナギク。

「にしても驚いたぜ、見渡せばヒナギクがいるんだもんなあw」

「私も驚いたわ、同じクラスだとは思わなかったw」

偶然って凄いな。

なんて思ったりしていた。

知らない奴が横にいるよりは、

ヒナギクがいてくれる方が気が楽だった。

side ヒナギク

昨日逢った男の子。

彼の名前は 荒木 ハレタ君。

転入してきた彼は私と同じクラス、

それだけどなぜだか胸が熱くなった。

しかも隣の席にきて少しドキドキした。

（何だろう？熱でもあるのかな？）

このときは私もまだ思ってもいなかったわ。
まさか、この人に…

「なあ、ヒナギク

桂先生なんだけどさあ・・・」

「雪路お姉ちゃん？がどうしたの？」
ヒナギクはさらっと答える。

「お姉ちゃんなのねw
いや苗字が同じだからきになつてさ」

お姉ちゃんであることに俺も納得した。

（でもにてないよなw）

それから授業が始まり・・・

体育の授業バスケをした。

E組に綾崎ハヤテつつつわものがいたが、
残念だったな。

運動なら誰にも負けん。

それが俺のとりえだ。

どう見ても俺より目立つ奴なんかこの学校にたくさんいると思うの
に、

俺も目立っていたようだw

人生で初めて、

女子にチャホヤされた。

どうゆう反応をしたらいいかわからなかったので
会釈をした。

正直興味が沸かなかったしw

こうしていろいろやってるうちに、
あっという間に放課後。

いろんな奴と打ち解けてよかった。
個性的な学校だな、ここは。

んで、今はあるところにむかっている。

コンコン

「入るよー？」

そう、俺は生徒会室を訪れた。

そして、そこで仕事をしていた一人の少女に声をかけた。

「この学校は疲れるわ、

いろんな意味でw」

ザ生徒会3人組と名乗る連中にはかきまわされるわ、

あやしげな執事さんたちはいるわ

小生意気お嬢さんはいるわで

大変だったw

「ヒナギクといた方がよっぽど落ち着くわ」

そう言った俺は心からそう思っていた。

「白皇の生徒はすごく個性的だから

まあ雪路お姉ちゃんにも言えることなんだろうけどw」

いろんな話に花が咲き・・・

「まあ雑談はさておき、
約束通り生徒会、入らせてもらっわ」

生徒会といえど、ヒナギクの補佐かなw
とりあえず、自分がやるべき事を見つけてよかった。
ヒナギク（生徒会長）に力を貸すこと今はそのことを考えていた。

・・・ナンデ ヒナギクニ キヲツカウ・・・？

それは・・・

「どーしたの？」

「ボーっとして？」

ヒナギクが不意をついてきた。
俺はドキっとして横を向いた。

この子って可愛いよなあ／＼／
今更思う俺であつた。

「いやなんでもない」

気合を入れなおし、ヒナギクにもらつた用紙に
書くこと書いてヒナギクに渡した。

「これでハレタ君も明日から生徒会役員の一員として
働いてもらうわよ？」

笑顔で言うヒナギク。

「おっおっ!」

笑顔にもドキッとしたw

いつまでもでれでれしてられないので、

「なんか今からでもやれる仕事ないか？」
男らしく決めておく。

だが、

「今日はハレタ君をら待ってただけなの」

・・・へ？

俺を待ってた？

思わぬ返答にとまどってしまった。
いや嬉しかったのだ。

「そっかぁ、わざわざありがとな」

とお礼を言う。

「そだ！

ヒナギク、アドレス交換しよ？」

さりげなく聞いてみる。

「あっ・・・うん！」

なんかはりきってる？

まあとりあえず交換が終わり

俺はちゃっかりヒナギクのアドレスを登録完了。

「男の子に私アドレス教えたことなかったのよねw」

何気ないヒナギクの一言・・・だが、

俺がヒナギクのアドレスげったのが男子で一番・・・

やったぜえ！笑
なんか嬉しかった。

「ええっと、じゃあ帰りましょうか？」

「そだな」

俺らは共に学院を出た。

ヒナギクに家が近いことを教えるとびっくりしていた。

「これで毎日一人で帰らずにすみそうね」

「俺がちゃんと送るわ」

このまま歩いて帰る・・・

ハズなのだが、俺はあることに思い出した。

「げげ！」

そいえば、明日編入後のテストだ・・・」

非常にまずい。

快適な高校生活を送るために赤点は避けたい。
家に帰って勉強するしかないとおもった。

そしたら、

「ハレタ君、いかにもまずいって顔してるわよw
何だったら私が教えてあげるわよ？」

そう、彼女は桂ヒナギク。

我らが生徒会長。

何でもこなすスーパー美少女

と俺はみんなには聞かされた。

その完全すぎる姿故なのか彼氏など、
できることがないようだ。

「頼む！教えてくれ！

今からみっちりやればたぶん大丈夫だろう」

ヒナギクの誘いは嬉しかったし、優秀な家庭教師に
教えてもらえてラッキーだった。

「じゃあ、私の家にくる？」

「はい、ぜひ行かせてもらいます！」
そう言い、俺はダッシで帰った。

ヒナギクにあえる！

あれ、趣旨かわってね？

まいつか。

とにかく急いだ。

次回はついに始動！

何がだよW

まあ気にするな、とにかく

次回に続く！

第3話 恋しちゃ、いやいや（後書き）

アドバイス・指摘・感想等ありましたら教えてくださると幸いです。
更新のペースが遅くなるかもしれませんが
気長に待ってください。

第4話 誰にも内緒でお勉強♪（前書き）

急いで書いたので、変ですが
第4話です。

見ていていただけたらと
思います。

第4話 誰にも内緒でお勉強♪

家に帰ってすぐ俺はヒナギクの家へ向かった。

「ここだな」

そう言い、チャイムを鳴らす。

「はい、どうぞー？」

もう聞きなれた少女の声が聞こえる。

ドアを開け、お邪魔しますと言って中に入る。

リビングにはヒナギクのお母さんがいた。

「いらっしやい、荒木君よね？」

ゆっくりしていつてね」

優しそうなお母さんだとおもった。

少し雑談しながらお茶をして、その後ヒナギクの部屋に行った。

「そろそろ勉強、始めましょ」

「そうだな」

俺たちは勉強を始めた。

わからないところはヒナギクは確実に教えてくれる。

マジで凄いとおもったw

「何でこんなにできるんだ？」
と聞いてみた。

「毎日勉強してるからよ。」

しっかり予習・復習を一日たった5、6時間やれば力は自然と力はつくわよ」

さらっと言つが、5、6時間って・・・w

どんだけ集中力あんだよw

「さすがだな、ヒナギク
才色兼備ってのはこのことだな」
「やっぱ会長さんは凄いお人だな。」

「てゆうか、最強の会長さんには
どんな恋愛事情があるんだ？」
「このことにものすごく興味があった。
周りは好きな人だな、恋人だの
いないと聞かされていたが実際はどうなのか気になっていた。」

「えっ・・・」
「べ、別に好きな人とかなんていないわよ」
「急に動揺するヒナギク。
この反応を見て俺は、」

「いるのか・・・」
「小声で呟く。
ああやっぱヒナギクだって恋するもんね、
こんな可愛い女の子を男の子がそれこそ
放っておくわけないな。
少しブルーになる俺。」

「そー言うハレタ君こそどうなの？」
「負けじと聞き返してくるヒナギク。
俺は、」

「好きな人なんて・・・」
「いるかもw」

恥ずかしかったがそう伝える。
俺の好きな人・・・

それは、

桂ヒナギク

今日の前にいる女の子

まだあつて短いのだが、

彼女は可愛くて、頑張り屋さんで俺によく気を遣ってくれたりもしてくれて

とにかく気がつけばもう俺は彼女が好きになっていた。

だから、ヒナギクに別に好きな人とかがいると

ちよつと苦しい。

今はバレないようにこの気持ちは隠すことにした。

でも、好きなんだから好きでいることに決めた。

いつかは気持ちを伝えなきゃとも思った。

「ねえ？誰なのか教えなさいよ」

まだ言えないから。

「秘密だ」

と答えておく。

「もー」

ほつぺを膨らませるヒナギクもまた可愛かった。

「いずれわかるさ」

俺はそう言う。

「・・・」

ヒナギクは何もいわなかった。

s i d e ヒナギク

ある男の子が言う言葉に私は振り回されてばかりいる。
なぜだかわからないこの気持ち。

そして彼には好きな人がいると
わかった時、
胸がいたかった。

この時にはつきりとわかったの。

この悲しさは妬いてることの裏返しなんだと知った。

私はそう

ハレタ君のことが好き
今確信に変わった、
この気持ち

いつかは伝えなきゃ。
でも怖いな。

とりあえず今はこの気持ちはしまっておく

そう私は思った。

ヒナギクの家にきてからもう2時間。

18時になっていた。

「もう18時かあ」

そろそろ俺、帰るわ」

「うん」

もう暗くなっていたし、かえることにした。

俺らは玄関まで出る。

「明日でもわからないことがあるなら私にききなさいよ?」

そういつてくれるヒナギク。

「おうつ、頼りにしてるぜ」

今日はありがとな」

「じゃあ、また学校であいましょ

ハレタ君!」

バイバイをして、ヒナギクの家を出る。

そして自分の家に帰る。

「あ、おかえり」

お姉ちゃんがもう帰っていた。

「ただいま・・・」

返事に元気がなかったようで、

「どーしたの？」

ハレタ元気ないよ？」

と聞いてきた。

元気がない？

まあそうかもな

自分には好きな人がいる。

でも、その子に別に好きな人がいる。

それがわかってしまつて少し悲しいからだ。

「別に、普通だよw

それより飯食おうぜ、腹へつてよ」

適当にごまかす。

飯を食い終わり自分の部屋に入った。

それからという・・・

ずっとヒナギクのことばかりを考えていた。

「やっぱ可愛いよなあ

いい奴だし、ドキドキしてるな・・・俺」

一人ぼそぼそ言う。

俺は恋をしたんだと改めて思う。

そう考えてると恥ずかしくなる。

ヒナギクのことを

考えてるとある意味やばい。

とゆーわけで、関係ないが風呂に直行した。

風呂から上がり、また部屋に戻る。
時刻は11時ヒナギクは何してるんだろう？
気になる俺であった。

そして就寝。

その翌日・・・

普通に学校があり、今は放課後。

明日がテストのため今日も勉強するつもりだった。
家に帰り勉強していた俺であったが・・・！？

ピンポンと聞こえた。

誰かきたと思いドアをあけたら・・・

あいつらがいた！

次回に続く！！

「って終わりかつ！」

by 咲夜

第4話 誰にも内緒でお勉強♪（後書き）

3日に1話を書くペースでいこうと思いますので
ご了承ください。

あと、次回は番外編を書きます。

これから番外編もちろつとまぜるかもしれませんが
読んでいただければと思います。

アドバイス・指摘・感想等ありましたら教えてくださいね。

番外編 うるへー奴ら（前書き）

番外編？です

変な文章ですが見ていってください。
楽しんでいただけたらと思います。

番外編 うるへー奴ら

俺が白皇にきた初日。

いろんな人と出会った。

まずは、担任の桂 雪路先生。

ヒナギクのお姉さんらしい。

ほんと何度見ても、

顔から性格まで・・・

似てない！w

そして、飲みに行くから金くれたの、

先生らしくない言動もそこそこw

先生としてホントに大丈夫なのか・・・？

次は、綾崎ハヤテ。

何でも三千院ナギお嬢様の執事をやっているらしいな。

ハヤテとはお互いなんか似たようなもんを

感じてなw

すぐ打ち解けた。

あいつとは話たいことがたくさんあるがまた今度。

そして、お嬢様である三千院ナギ。

ハヤテ、いわく最先端のHIKIKOMORIだとかw

まあハヤテのことが好きなんだな。

俺にはそう見えた。

何が？

全部だ！

負けず嫌いなお嬢様は、実は乙女チックだったりするかもな。
あと、なぜか飛び級している。

13歳だそうだ。無駄に頭はいいのかw

次は、鷺ノ宮 伊澄さん。

なぜか和服を着ている。

まああとあと聞いてみれば、ちゃんと意味はあったようなかった
ような・・・w

悪霊退治を行える巫女有能力があるらしい。

悪霊・・・かw

ちなみにこの伊澄さんもお嬢様。
そしてナギと同じく飛び級生。

てか飛び級生多いよな・・・w

もう一人の飛び級生、橘ワタル。

レンタルビデオ屋の店長なんだとか。

13歳でビデオ屋ねw

成立すんのかよ・・・？

ナギいわく伊澄さんに惚れてるみたいだ。

次はおそらく一番やつかいな気がした、
ザ・生徒会役員もとい

花菱 美希、瀬川 泉、朝風 理沙
の3人組。

名門白皇学院にあつてはならぬ
いわば恥の代表であるだろう。
とにかく疲れるんだ。

3人組といたらw

てかこの3人主要人物なんだなw
使い易いから

とかゆう理由で作者はだしちゃうわけねw

そして、白皇学院の生徒ではないのだが、
愛沢 咲夜とゆう関西弁を話す子にもであつたな。
無類のお笑い好き。

何かしらツツこんでくるw
さすが関西人とでも言おうか。
なんで学院内にいたのかは不明。

あとは、2人の執事さんに2人の坊ちゃんと会つたな。
ヘタレ坊ちゃんに女の子みたいな坊ちゃん、
それに従える最強執事たち。

(→が分かる人はわかると思います)
まあ省略でw

最後にナギを向かえに来ている、
三千院家のハウスメイドさんもマリアさんにも出会つた。
綺麗な人だなあと思つた。

年齢はなんと17歳？
一つしか違うのにずいぶん
人生の先輩に見えるのはなぜだろう・・・

とまあ個性豊かな面々と対面した
初日だつた。

前にいた学校の友達を思い出した。
あ、俺が転向してきた理由を言っただけな

単純に親が海外に行くため、
寮生活だった、前の学校から
一人になってしまっ姉ちゃんのところに
移動した、
学校も白皇が近かったからそこにしたw
それだけのことさ。

（まあもつと単純に言えば、主人公は原作には登場しない作者の
考え出したオリジナル、
そしてそのオリジナルとヒナギクを特別なシチュエーションで
立ち会わせるためには

夜のあの出会い！！
あれしか浮かばなかった！！
ただそれだけのことであるw）

れつつとーきんぐ with 作者&ナギ

ナギ「てゆーか、番外編とかいいながら

キャラ紹介になってるじゃないか！」

作者「物語を進めていく上で、こっちのほうが何かと

楽なんじゃないかと思ってさw」

ナギ「まったく、何を考えておるのだ・・・」

どうせなら、マジカルデストロイにさしかえても・・・」

作者「残念だが、俺にもあの漫画は理解できんだよw

第一この物語で最も主要な人物は

ヒナギクとハレタだよ

だから！

出番のないキャラにローテーションで

このトークに出演してもらおうと思う」

ナギ「まあな」

ヒナギクとハレタ以外ほとんどの

奴らが会話するシーンがないからな

作者に小説を書く実力がないのも悲しもんだな」

作者「ぐっ・・・」

初投稿だし、小説をうまく書く自信もない・・・

けど！大事なのはハートだ熱いハートがあれば俺は

なんだってできる！」

ナギ「なら私たちにも出番をよこせ！」

作者「うぐ・・・」

まあ可能な限り実行してみまあす

と！ゆーわけで、次回は本編に戻りますよ」

ナギ「うむ、いるかわからないけど、

読者のみなさんも楽しんでくれたまえ」

作者&ナギ「次回に続く！」

とまあこんな感じで次回に続きますよ」

番外編 うるへー奴ら（後書き）

いろいろやっちゃった番外編です。

次の番外編はちゃんとした話にしようと思います！

次回からは本編に戻りますので
よんでみてくださいね。

第5話 白皇のくせ者（前書き）

なかなか、話が浮かばなかったの
でおかしな文章ですが、

第5話です。

最後までみていってもらえると嬉しいです

第5話 白皇のくせ者

ドアの向こうにいた奴ら・・・

それは、生徒会の3人組だった！

「やあ、荒木君^{ハレタ}」

3人揃って言う。

「何しにきたんだよ？」

てか、俺の家知ってたんだな」

「いやあ、明日テストの荒木君の

勉強を手伝いにきてあげただけのことなのだよ」

朝風が言う。

「政治家の娘だ、情報収集なら得意

住所などすぐわかる」

次に花菱が口を開く。

「まあ暇だから、きたただけの話なんだけどね」

最後に瀬川が言う。

同じ生徒会の一員なんだが、

この3人組は何かとやっかいなので、
適当なこと言って、帰ってもらうか。

「ああなんか、腹痛いなあ

これじゃ勉強できないなあ

こんな時は寝るのが一番だなあ

と、ゆーわけで今日はダメだお引取り下さい」

(→、棒読み)

「そうかそうか、

私たちといると面倒なので帰ってもらおう

さしずめこんなことを考えていたのдар？」

何で無駄に鋭いんだよ。

「あいにくだったな、荒木君

私たちは信念は曲げない！」

「とゆーわけで、

お邪魔しまーす、ハレタ君♪」

「な・・・」

あっさり侵入されてしまった。

もういいや・・・

と半ば諦めた俺であつたw

「俺の部屋で勉強するぞ、

こっちきて」

にしても、何もおこらないことを願おう。

「にはー、ハレタ君の部屋って・・・

普通なんだねー♪」

瀬川がきよろきよろしながら言う。

「別にいいだろ？

それより勉強勉強！」

話を強引に進め勉強を始めた。

初めは3人組も静かだったが、だんだん痺れが
きてきたのか、

「ゲームやるか」

とか、

「泉の負けー！」

一枚服脱ぐんだぞ」

とか、

「キャー」

そんなことまでも??」

「フッフッフ、我が動画研究部としてこれは頂くしかないな」
とか、聞こえてきて・・・

「だぁもー」

後ろで騒ぐな集中できんだろ」

俺が先に爆発してしまった。

「まぁまぁ落ち着いて」

もう1時間以上は頑張ったんだからさぁ
そろそろ終わって私たちとゲームしようよ」

まぁそろそろやめようと思ったので、

「少しだけならやる」

と言い、俺も混ざった。

「具体的に何をやるんだ？」

これは・・・ババ抜き？」

「ああ見ての通りさ、

ただのババ抜きさ」

「うむ、ただのババ抜きだよ」

朝風と花菱が言う。

なんかトゲのある言い方w

「わかった、ぱぱつとやっちまおうぜ」

そしてババ抜きは始まる。

数分たち、

「よっしゃあ、あがったあ！」
1番に俺はあがった。

「おお速いね〜ハレタ君♪」
相変わらず笑顔の瀬川。

「ところで罰ゲームがないな」
と花菱。

「罰ゲームか、
なら罰ゲームは

最下位の人クジを引いて
それを…に実行させるのはどうだ？」

朝風からの提案。
だが、

「何に実行させるんだ?」

俺は問う。

「よし、そうしよう」

「なら早急に、クジをつくらなければ」

俺の質問はスルーかいw

何やら陰謀めいた臭いがするな・・・

そしてたくさんの紙に色々書いた花菱たちは、ババ抜きを再会した。

それからまた、数分。

2位 朝風

3位 花菱

最下位 瀬川

とゆー結果になった。

「わぁー負けちゃったよー」

あんまり、悔しそうじゃないのは気のせいか・・・?

「最下位の泉にはこれを引いてもらっぞ」

と朝風が言い、抽選とかでよく使いそうな箱を取り出す。

「この中にある紙を引いてそれを実行するんだぞ」

花菱が確認する。

「わかってるよー」

瀬川は一枚紙を取り出した。

のぞいて見ると、

『好きな人暴露』

と書かれてあった。

「ほおなかなかお前らしちゃまともじゃんw」

俺はおもしろそうだから乗ることにした。

・・・が！

「は？荒木君、何を言ってるんだ？
実行するのは荒木君だぞ？」

さつき最下位がやるって言ってたよな？
いや、待てよ・・・

あの…が俺を示したってことか。

「くそっ、ハメやがつたな」

乗るんじゃないかった・・・

やつぱり、こいつらやつかいだw
今になって後悔。

「でもさ、俺の好きな人なんか知ってどーすんだよ？」

あざ笑う奴らに聞き返す。

「言いふらす」

「バカにする」

「金は。より重い！」

なんか違つの混ざったような気がするけどw

「言いふらすのも、バカにするのもやめてくれ
教えるから」

俺は深呼吸してから、

「実はな・・・」

「ヒナちゃんが好きなんだよねー」

！？

まさかの不意打ちに言葉が出なかった。

てゆうか知ってるなら聞くなよなw
しかもなんで知ってたんだ？

「そりゃ、私たちは荒木君を監視してたからなあ
にしても、わかりやすいのだよ、荒木君」

「俺、今喋ってないよな？
しかも監視って・・・」

あ、この3人組だもんな、
普通なのかなと、冷静に開き直る。

って認めてもいいんかい！
→つつこみを入りたい人の代弁をさせていただきましたw

「暴露して、恥ずかしくないのか？」

「別に、ヒナギクに言うわけじゃないし、
そこまで恥ずかしくないな」

ホントにヒナギクの前ではどうしても言えないんだよなあ

「きっかけさえありゃなw」
ポツリと呟く。

「私たちに、任せておけ！」

3人は声を揃える。

任せるつつたつて、こいつらじゃなあゝ
不安要素ありすぎっだつーの。

「いや、できれば自分の力で気持ちは伝えたい」

自分の本心を伝える。

「あああくまできつかけを作るにすぎない。
そこからどうなるかは荒木君たち次第だ」

「悪意はないよな・・・？」

恐る恐る聞いてみる。

「もちろんないよー！
ねえ2人とも？」

「ああ」
「うむ」

顔は笑ってない。
マジに言っていると受け取っていいだろう。

人の好意は受け取っておくべきだよな。
そう言い聞かせ、

「なら頼むよ」

3人を信じることにした。

「明日の夜10時、生徒会室に一人で行くんだ
いいか？」

「明日かよ・・・」
でも気持ちは固まってるんだ
早く言うのにこしたことはない

「ああわかったよ」

心の準備しとかなきゃw
そう思った。

「なら私たちはヤボ用があるので・・・
ドロン」

消えた・・・
もうあいつらはなんでもありだなw
そう思った。

それといい奴だとも思った。

にしても、ヒナギク何してるんだろう？

告白しても振られるかもしれない・・・

やっぱり怖いかもな。

・・・でも！

決めたことだ。

ちゃんと気持ち伝えれば、ヒナギクだって聞いてくれる。
クヨクヨするのは後だ。

とりあえず今は

前向きでいこう！

- - 翌日、何かがおこる！！

まあとゆーわけで

次回に続く！！！！ - -

第5話 白皇のくせ者（後書き）

アドバイス・指摘・感想等ありましたら、教えてもらえると幸いです。

第6話 参上！正義のヒーローは遅れてやってくるものさ（前書き）

ヒナギク視点の第6話です

書き方がバラバラでわかりにくいかと思いますが
読んでもらえれば嬉しいです。

第6話 参上！正義のヒーローは遅れてやってくるものさ

（ヒナギク視点から始まりますw）

ハレタたちが勉強している時、
ヒナギクは家でボーっとしていた。

勉強しても、心ここにあらず。
集中して物事に取り組めなかった。

「どーしたんだろう・・・私？
さっきからハレタ君のことばかり、
こんな気持ち始めてだわ・・・」

ヒナギクもはつきりとわかってきたようだ・・・

男の子を好きになるとゆー初めての気持ちに戸惑いながらもすっかり自覚する。

「私は、ハレタ君のことがやっぱり・・・

・・・好き・・・なんだ

このときめきは伝えるべきかしら・・・？

いや、そうよね・・・

でもいなくなったり・・・しないよね？」「

恋愛感情と同時に不安も抱くヒナギク。

とまあこんなことをヒナギクはずっと考えていたのだ。そうしていると・・・

ピロリロ〜♪
携帯が鳴っている。

誰だろう？

まさか、ハレタ君！？

ディスプレイをしてみる。

なんと・・・

「もしもし、何の用事かしら
美希？

おそらく理沙と泉もいるんでしょうけど
「

「さすがヒナだな、お見通しか」

そう、あの3人組である。

「まあ、今日は大切な話があるんだよ」

「大切な話・・・？
なんなのよ？」

いつもと違った感じなことをヒナギクは感じ取った。

「ヒナ・・・お前荒木君のこと好きだろ？」

「えっ、そんな・・・違うわよ／＼／＼」

いきなり核心をつかれ、動揺するヒナギク。

「隠さなくていいんだよお」

そんなこと言われたって・・・
恥ずかしいし・・・

「さっきまで荒木君のことでも考えていたんだろ？」

こーゆー時は何でこんなに鋭いのよー／／／／
心で訴えるヒナギク。

「正直に言ったら、どうだヒナ？
私たちはもう確信している、
あとはヒナに確かめるだけなのだよ」

「もー・・・」

って確かめてどーするつもりなのよ？
何か企んでるわね？」

「いや、別に企んでるわけではないんだ
お互い動こうとしないから動かしてあげようと思ってな
おっと言いすぎたかw」

「はい？動こうとしない？何がよ？」

あれ？
ちよつと待ってよ？

動こうとしないって、この話から察するに
私の恋愛のこと？

動こうとしない・・・

つまり、むこうも同じことを考えてる？

そんな・・・！？

そんな展開であっていいの？

ヒナギクは、マリアのような驚異的洞察力を発揮し、
瞬時に状況を判断するのであった。

「ええ、私は

ハレタ君のことが好きよ／＼／＼」

このまま何もおこらないよりは、
ヒナギクは何かがおこることに懸けたようだ。

「明日その気持ちを伝えるんだ！」

ヒナギクは急すぎる発言に、ついていけなかった。

「そんな・・・
まだ無理よ・・・／＼／＼」

そこにいつもの元気はなかった。

そんなことはおかまいなしに、3人からの追撃。

「もうハレタ君に話はつけてある

明日の夜10時に生徒会室に一人でいってこい！

そして、告白するんだヒナ！！」

「だからそんな・・・」

言おうとしたがやめた。

プーッ
プーッ
プー

電話はすでに切れていた。

どうやっても勝てない悪魔たちは
女神の顔をしているかのようにちゃっかりしていた。

「余計なことを・・・
でも、チャンスなのかも・・・

これが、私に与えられた試練だったら

やるしかないわ！

いくのよヒナギク！！」「」

ヒナギクは自分に言い聞かせた。

やる時はきっちりやる。

それが現・白皇学院生徒会長、桂ヒナギク！

明日に備えて・・・ってわけでもないが、ヒナギクは寝ることにした。

複雑の心境だったので、なかなか寝るのに時間がかかったのは言うまでもない。

次回、2人の関係にやっと思開けか？

ちななわけで、
第7話に続く

続くつたら続く

トークとーく・タイム

ハヤテ&マリア&作者

ハヤ「ついに出演ですね」

マリアさん

マリ「まあ出演といってもおまけなんですけどねw」

ハヤ「それは言っちゃダメですよ！

このままだと本編にちゃんと出れるかすら曖昧ですからw」

マリ「確かにそうですね、

ナギも言うとおり、作者に上手に小説を書く力がないですから」

ハヤ「まったくですね」

作者「はいはい、すいませんでした

とりあえず落ち着いてきたら、少しずつ出演くるから、今は裏方に回ってて」

ハヤ「はあ、とりあえず期待しときますw」

マリ「にしても、今回は生徒会役員の3人がキーマンとなってますね」

ハヤ「なんであの3人なんでしょうね」

作者「あの3人ならやっぱ・・・

何でもありだからだなw

俺的には話がつくりやすいw」

マリ「どっちにしても、

次回で2人は恋人どうしになるぽいですね」

作者「さあ、わかんないぜ」

まあお楽しみだなw」

ハヤ「そろそろ、時間ですよお2人さん」

作者「だな」

全員「次回もお楽しみに！」

以上！次回に続く・・・

第6話 参上！正義のヒーローは遅れてやってくるものさ（後書き）

「でかこまれているのは、そのキャラの気持ち、
は天の声風のつもりですのでご了承くださいw

第7話 小さな始まり（前書き）

訳あってしばらく投稿してませんでした、
これからは不定期ですが更新していくので
よろしく願います

ナレーターはこれから作者です

第7話 小さな始まり

二人が気持ちを伝えることを決意し、ついに運命の日をむかえた。

まあ1日しかたっていないのだが。

時刻はすでに21時。

約束の時間まであと1時間・・・

その頃の二人はと言うと・・・。

「ハレタあ？ごめんけどそこにある雑誌とってくんない？」

いつも通りのハレタ姉。

「・・・」

「おーいハレター？」

「・・・」

「おーい！」

気づかないので段々声が大きくなっていった。

「ん？ああ、ごめつ。ほい」

ようやくハレタは気づいて雑誌を渡した。

「ありがとう」

ところで、ハレタくゝん何かあったでしょ？
それとも何かあるとか？」

驚異的洞察力……。
とゆう訳でもない。

明らかにいつもと違う弟に実の姉が気づかないわけがない。

「別に・・・なんもねえよ／＼／＼」

動揺がばれないようにすぐさまハレタは自室へ。

「へえ／＼ハレタもついにねえ／＼・・・」

クスクスとハレタ姉は笑っていた。

同時刻、桂家では・・・。

無論、ヒナギクも自分の義母にいじられていたようだw

- - - そして - - -

22時まで残り30分のところ。

二人はすでに生徒会室へむかっていた。

家が近いためにはちあわせると思いきや、二人はお互いに気づかないまま、一定の距離離れて学院まで進んだそう。な。学院内でやっと会った二人は、まだ30分くらいあるのに

何で？と言わんばかりであった。

まあ、お互い様なんですけどね。

生徒会室へついた二人。
しばしの間沈黙だったが、ハレタがそれを破る。

「あのさ……。こんな夜で悪いんだけど
今日ここに呼んだ訳……。言わなきゃな」

深く深呼吸をして気持ちをもう伝えてしまおうとした時……

「えっ！？私もハレタ君を呼んだつもりだったんだけど・・・」

不意にヒナギクが言った。

「あれ？

マジ？

じゃあ、先に俺の話を聞いてくれ」

もう一度、深呼吸をして・・・

「桂 ヒナギク、俺は君のことが好きだ。
急でごめん。
細かいことは言わん。」

「・・・付き合ってくださいませんか？・・・」
ハレタは顔を紅く染める。

ヒナギクは・・・。

「・・・！！！！／／／／／」

声に出してはいないが、さぞかし驚いたようだった。そして、

「あ．．．あのね、ハレタ君．．．
私も．．．その、

ハレタ君のこと．．．

好き．．．」

沸騰するかのように、ヒナギクは熱くなっていた。
いつきに足の力が抜けその場に座り込んでしまった。

「・・・」

ハレタも何も言わなかった。

ヒナギクに近づき、そして、彼女を力いっぱい抱きしめた。

決して離れることのないように、心をこめて・・・

ヒナギクはそれを拒むことなくハレタの温もりを感じていた。

「改めてこれからもよろしくな！
ヒナギク」

「うん／＼／／」

二人は赤面していたが、お互いに幸せを感じていた。
数分後、生徒会室を共に後にした。

恒例♪ おまけ（トーク）タイム
作者

生徒会3人娘&

いず「いやゝついにハレタ君とヒナちゃんできちゃったよゝ」

りさ「こうなることは、わかっていたよ」

みき「うむ、私達の頑張りも報われたということだ」

りさ「出番が多いうえに、活躍するのもなかなか悪くわないな」

いず「だねゝ。だけどネタがないみたいだから、

次から何がおこるかわかんないよゝw」

みき「フツまあ気長にやっていくさ。」

りさ「ああ、そーゆー作者だからな」

作者「つたく、黙って聞いていれば、色々いわれてんなあ・・・

ま、自分なりに頑張っていくのでゆるくお付き合いください

w」

・・・とまあ次話をお楽しみに

第7話 小さな始まり（後書き）

コメントがあれば、何でもいいのでださいw
待っています（笑

第8話 無駄にならない1日（前書き）

どーでもいいようなことばかりの話ですが、
ぜひ見てください。

第8話 無駄にならない1日

ハレタとヒナギクが恋人同士になったその翌日・・・

学校が普通にあるのでハレタは『彼女』の家まで
迎えに来ていた。

ピンポーン

「はい？あら、荒木君」

ヒナママがハレタを見るなりニヤける。

「あの、ヒナギク……さんを迎えにきたんですけど……どうかしました？」

「うふふ、何でもないわ、それよりヒナちゃんね？今呼んでくるから」

ヒナママは昨晚の出来事を知っているから、ヒナギクの『彼氏』を見て

にやついたのだ。

そうとは知らず、ハレタは？を頭に浮かべていたが

ヒナギクがきたので取り払われた。

「おはようー！」

・・・急にどうしたの？」

理由はだいたい分かっているが、ヒナギクはあえて聞いてみた。

「・・・迎えにきたただけだけど・・・」

少ししょんぼりするハレタ。

だが、

「わかってるわ、ありがと
来てくれて」

少し顔が紅いヒナギク。

その言葉を聞いてハレタも少し照れる。

「ラブラブもいいけど、早く行かないと遅刻するわよ?」

不意にヒナママに話かけられた。

「!!! / / / /」

互いに驚いたようだ。

「もっ、お母さんたら・・・」

まあ行つてきます」

「・・・行つてきます／＼」

「はい、行つてらっしゃい」

ヒナママは笑顔で二人を送り出した。

「なあヒナギク、その・・・
お母さんには昨日のことを言ったの？」

「・・・ええ、恥ずかしかったけど素直によるこんでくれたわ」

「そっか・・・
よかった」

— 安心するハレタ。

とまあ、たわいもない会話をはずませているうちに学院についた二人
教室にはいると・・・。

「おい、荒木！」

桂さんと付き合ってるというのはほんとうか？」

「桂さん、コイツと付き合ってるんですか？」

「付き合っていないわよね？ね、荒木君？」

なぜか周りは知っていて、質問攻めをされる二人。
最初のうちはごまかしていたんだが、

あまりの人の多さに、二人は自白しようと思った。

周りを静かにさせて、

「えー、みんなの言う通り俺たちは付き合ってます・・・／＼」

「ハレタ君の言った通りです／＼」

堂々と暴露。

まあこれで二人はやっと落ち着けた。

余談だが、真実を知った学院中の生徒は二人が美男美女でもてるため、
がっかりさんやしょんぼり君が続出したようだ。

放課後・・・。

生徒会室にハレタは足を運んだ。
無論、生徒会の一員なので仕事をしなければならない。

コンコン

入室したが、そこには誰もいなかった。

「ヒナギクは……。いないか」

ハレタは少しテンションが下がったが、早速仕事を始めた。
一通り書類に目を通したり、レポートをまとまたり、黙々と作業を
こなしていった。

（あくまで小説の話なので、実際にこんなことをしていかがはわかり

ませんw)

1 / 3 くらい作業をこなしたところであつた・・・。

急に扉が開きハレタは注目する。

「ごめん、剣道部のミーティングがあつて遅れちゃった」

申し訳なさそうにあやまるヒナギク。

「ヒナギクは部長も兼任してるし、しょうがないって」

「そう言ってもらえると助かるわ」

「今日の分は結構やっといたからさ、さっさとやっちまおうぜ」

二人はさっさとモードを切り替え作業に集中する。

（ハレタもヒナギクもすごい集中力の持ち主である。

ハレタの設定は美男子であるうえ、スポーツも万能。

アプノーマルな性格も備えてないし、

ハヤテと違い・・・

カッコいい！！笑）

数十分後・・・。

「これくらいで今日は終わりましたよっか？」

仕事に集中していたため、お互い無言だったがヒナギクが口を開いた。

「ああ、んじゃ帰るか」

「うん！」

帰る道中ハレタはあることを思い出した。

「そういえば、明日俺の親が帰国してくるんだった！」

すっかり忘れていて、急に思い出すハレタ。

「それは、よかつたじゃない！」

「まあそうだけど、なかなか癖のある親だからなあw」

苦笑ぎみのハレタ。

「それでも両親と再会できるのは嬉しいことだと思っわ」

ヒナギクの言葉を聞いたハレタは・・・

「んー、俺んち来ない？」

来たら、わかるよ？」

「え／／

．．．うん／／／／
昼ごろに行くけどいい？」

家に来るか誘われヒナギクは紅くなった。

「うん、午後には帰ってくるらしいから、
それぐらいでいいよ」

そう約束をして、二人はそれぞれの帰路に着いた。

s i d e 〵ヒナギク〵

ハレタ君と付き合い始めて、まだ間もないけれど、
今がすごく充実している。
となりにいてくれるだけで、幸せ。

笑顔を見せてくれる時はもつと幸せを感じる。
そのハレタ君のご両親に明日はきちんと挨拶をするべきよね。
にしても、緊張するな・・・

二人は家に帰ってからいつも通り過ごし、そして、

明日をむかえるために就寝した。

次話に続く！

第8話 無駄にならない1日（後書き）

おまけは今回はなしですw

時々いれていく感じでやっていくので
ご了承ください。

第9話ヒナの訪問（前書き）

投稿が遅くなりました。

でも、とりあえず15話くらいまでは考えてあるので待っていてください。

第9話ヒナの訪問

翌日、朝。

荒木家では…。

「やめてくんねえかな、としがいもなくイタズラなんて…」

ハレタはおきてすぐ驚き呆れた。

「もぉー、さめてるわねえもつとないの？
キヤーとかわぁーとかさ」

「たまには、お前たちにこんなことをするのも悪くはないからな」

慣れ慣れしい口調の人たち。

「まあ、んなことよりお帰り
母さん、父さん」

そうハレタの父母である。

（ ） どんないたずらだったかは皆さんのご想像にお任せします（ ）

「あ、ハレタ！おっはー」

ハレタ姉はすでに親の帰国を知っている。

「おはよ。姉ちゃんご飯できてる？」

「うん、お父さんとお母さんがいるから、早めに作っておいたよ」

何らかわりのない会話。

「いやあ、飛行機の予定では、午後あたりの帰国だったんだがな、

予定が早まって早朝には帰ってこれたよ」

ハッハッハと笑いながは話すハレ父。

「お土産もたくさんあるから、後で見えてね」

久しぶりに一家だんらんを楽しむ荒木家。

そこでハレタはヒナギクのことを思い出した。

「そういえば、今日ウチに友達がくるから、ちゃんとしてよ」

何か失礼なことをするのではないかと思うハレタ。

「友達ねえ」。

あ、お母さんハレタね、なんと愛しの彼女がいるんだってえ〜」

ニコニコのハレタ姉。

「え〜！？

ハレタもついに女の子と付き合ってるの！？？どんな子なのよ？
ちゃんとお母さんに言いなさいよ〜」

食いついてくるハレタ母。

「ちょ、姉ちゃん何言ってるんだよ／＼／＼／

そんな人…いないって」

少し赤くなる。

だが、さすが姉と母だけあって、ハレタがなかなか見せない反応を見て彼女がい
ることをもう確信した。

「あ、もしかして、たまにしかない私たちに挨拶しに来るのかしら？」

ハレタの発言はスルーして、質問攻めをする。

まあ家族だし、言わなきゃならんとハレタは諦めた。

「今日の昼、うちに来るから、まあ失礼のないように頼む」

「わかってるよ」

姉と母は楽しそうに頷く。

ちなみにハレタ父は、
せっかくの日本を楽しむため、
さっさとでかけてしまった。

そして問題の午後。

ピンポン

「あ、来た！」

ハレタは玄関にかけつけた。

「あ、ハレタ君！！」

予想通りヒナギクがそこにはいて、ハレタは少しニヤけてしまう。

「どうなの？」

「いや、何でもないよ。
それより、入って入って」

目的を思い出す。

「うん！
お邪魔します／＼」

リビングでは、ハレタ姉、母が昼食の後片づけを行っていた。

「あら、桂さんよね？
いらっしやい」

「初めまして、桂 ヒナギクといます。

ハレタ君とは同じクラスでいつもお世話になってます」

ハレタの親族がいい人そうで少し安心した。

「まあ、もつと楽にしていぜ。

母さんも姉ちゃんも案外愉快な人だからさ」

ハレタは小声でヒナギクに呟く。

「うん、いい御家族じゃない」

ハレタ姉と母の気楽な様子を見ていて、

ヒナギクも自然とリラックスしてきた。

「ヒナギクちゃんていいよね？」

不意にハレタ姉が話しかけた。

「はい、えっと…」

「私はコトネって呼んでくれればいいよ」

名前をここで明らかにしよう。
彼女の名前は荒木 コトネ。

「はい、コトネさん！」

早速打ち解けたヒナギク。

それから、ハレタ母も話に参加し、いろいろ盛り上がった。

「ヒナギクちゃん、ハレタのどこがいいのよ？」

ぶっちゃんけさあ」

「え／／／／

それは…」

恥ずかしくて言葉に詰まるヒナギク。

ハレタも少し気になったのだが、

「えー、困るようなこと言ってやんなって／＼」

ヒナギクをいじらせるわけにはいかないハレタ。

「いじってなんかいいわよ、
それにあんたも気になるんじゃない？」

不適に笑うハレタ姉と母。

「はあ… ったく」

実際はもの凄く気になってはいるが・・・

ヒナギクを集中的に攻撃していたのでハレタはとりあえず、自分の部屋に行くかとヒナギクを連れていこうとした。

「ヒナギクちゃん、

ハレタはまだまだ子供だから手なんか出してこないわよ」

最後の追撃。

「カアアアア…

大丈夫です／＼／＼」

苦笑するヒナギク。
そして、ハレタの部屋へ。

「こうなることは、大体予想できたんだけど…
なんかわりいな」

「楽しかったし、大丈夫よ
ハレタ君んちはいい一家ね」

素直な返答。

「そう言ってもらえると助かるよ」

そう言いつつ、ハレタは時刻が気になった。

「まだ15時、これからどうしよつか？
リビングにいてもろくなことがないからなあ」

「それなら、暇だし
私の行き着けの喫茶店でも行かない？
おいしいカプチーノがあるの」

このカプチーノとは、1期48話のアレである。

行き場もないし、ちょうどいいと思い、
ハレタは賛成しさっそく家をでた。

第9話ヒナの訪問（後書き）

なるべくはやく次の話は投稿したいと思います。
まあ不定期更新ですので気長にお願いします。

第10話ヒナの訪問（ハレタの憂鬱1）（前書き）

オリジナルなところはあまり出しくなかつたんですが、
出すしかない状況なので…

とりあえずお楽しみいただければと思っています。
それでは第10話です

第10話ヒナの訪問（ハレタの憂鬱1）

前回からの続き。

家を出た二人は、今、喫茶店にいる。

「このカプチーノやっぱりおいしいでしょ？」

ヒナギクは、気分転換する時など、暇な時間に訪れては、よくカプチーノを飲んでいる。

「あぁ……」

ハレタはキョロキョロしている。

なぜなら、この辺の地理にあまり詳しくないからである。

「どうしたの？」

「ん？」

いや、この辺は全然来ないからさw」

ハレタは以前は東京の近くにある、
と言うか隣接している神奈川から来たので
この辺の地理のことはよく知らない。

「ああ、そっか」

少し考えてから、ヒナギクからよい提案が。

「どうせなら、この辺を探索しない？」

「おっ、サンキュー」

んじゃ明日にでも頼むよ
日曜だし、何もないっしょ？」

ありがたくその提案にハレタは乗った。

「うん」

ヒナギクは笑顔になる。

え？なんでですか？

「そ、それは…」

事実上デートだから／／／／

あーなるほど」

「言わせたわね…」

気のせいですよ。

「何、ボソボソ言ってるの？」

「あ…何でもないわ」

素直に言つのも恥ずかしいのでごまかした。

「まあともかく、今日はごつするっ…」

現在は16時。

結局は初めと同じ状況に陥る。
この辺の探索に出てもいいのだが、
ヒナギクと時間いっぱい居たかったので
楽しみは取っておくことにしている。

「とりあえず、家に向かって歩かない？」

「そだな」

とにかく二人は歩き出した。

「こつやって、二人きりでゆっくり話せるのってあんまりないよなあ」

「…うん」

二人きりで歩いているだけだが、
これも立派なデートな気がするヒナギク。

少し歩いていると、

「負け犬公園だ…」

ちょうどいいところに公園が。
中に入り2人はベンチに腰掛けた。

「そういえば、ハレタ君って部活とかしないの？
運動神経はものすごいじゃない」

「……」

急に黙り込んだハレタ。

「って、聞いてる？」

ハレタの顔をヒナギクは覗きこむようになりアクションをとった。

「わりいわりい、
ちよっと昔のこと思い出してしまっただけ……」

「ふーん……」

で、部活には入らないの？」

仕切り直すヒナギク。

「部活はやらないよ……」

ハレタは少し暗険しい表情をした。

「そっか」

もしかしたら、剣道部に
なんて期待をしたヒナギクだが、
少しがっかりした。

(それにしても、ハレタ君、どうしたのかしら…?)

「それより、ヒナギクは生徒会長と部長の
2役で大変でしょ？」

「ええ、できる限りどっちも頑張りたいんだけど、
片方がおろそかになっちゃうのよね」

ヒナギクは笑っているが、
ハレタはさすが生徒会長と思った。

（ヒナギクは何でも妥協しないな。
見習わなきゃな）

「できる限り努力する姿勢は、
すごくいい事だし

そんな頑張り屋さんは好きだな／＼」

遠回しにヒナギクを好きと言っている。

ヒナギクは、それを理解し
頬を赤くした。

「俺も、前の学校では生徒会入って
部活もやって
自分なりに頑張ってたんだぜ」

自慢げにハレタは言う。

「へえ」
「前の学校では何部だったの？」

部活の話は地雷だったことに
言ってから気づく。

「前の学校では

野球・・・やってた」

ヒナギクの思惑通り、
ハレタは少し暗くなる。

「そうだ！

ハレタ君、聞いて聞いて・・・」

「ん？どした？」

ヒナギクの話術で地雷は爆発せずに済んだ。

それから、少し話をしていたら、

辺りが暗くなってきたので2人は帰ることにした。

「明日は、じゃあ10時くらいに迎えに行くけど
それでいい？」

「うん！」

「んじゃ、また明日な」

そして、夜。

ヒナギク宅では…

「ねえヒナちゃん、
これ見てみて」

そう言つて、ヒナママは
ヒナギクにとある雑誌をみせる。

「何これ？
スポーツ誌？」

ヒナギクはそれをパラパラめくつてみると、
高校野球のページに目が止まった。

「全国高校野球選手権神奈川大会、優勝校はなんと……」

全員1年生！？

歴史を塗り替えた、。 。学園！！
エース荒木 ハレタ（16）と4番仙……

…つて、ええ！？」

そこにはハレタを含む、
1チームの記事が堂々と載せてあった。

ヒナギクはこの記事に、
とても驚いていた。

「荒木君って、もの凄い実力者みたいね」

ヒナママがたまたま古い雑誌を見ていたら、偶然その雑誌を見つけたようだ。

「以前は野球をやっていたらしいけど、こんなに凄かったなんて…」

ヒナギクは今日の夕方のことを思い出していた。

s i d e ヒナギク

これほどの実力と功績があつて、
部活を続けないのはおかしいわ…

なぜか、その話題には触れたがらないし、
きっと何かあつたんだわ。

悩みがあるなら私に言ってくれてもいいのに…

ヒナギクは何となくハレタに何かあつたのだと、

感づき始めていた。

そして、自分にはそれを隠そうとしているハレタにも気づきかけていた。

続く…

第10話ヒナの訪問（ハレタの憂鬱1）（後書き）

感想があつたら、

ぜひ教えてください（笑）

不満とかリクエストとか何でもいいので…笑

第11話 ヒナの訪問（ハレタの憂鬱 2）（前書き）

むちゃくちゃになってきて、

何がなんだかです。

理想通りに書いていくのって難しいですね。

第11話 ヒナの訪問（ハレタの憂鬱 2）

本日は晴天なり。

まだ1月だが、
外に出るにはいい天気である。

（お、いい天気♪）

目が覚めたハレタは、
青空をみてすがすがしさを感じる。

いつまでも、のんびりしている訳にはいかないので
起き上がり、とりあえず顔を洗いに行った。

シャーシャー

洗面台には、ハレタ父がいて
歯磨きなどしていた。

「おはよう、ハレタ」
今日は父さん、ご機嫌だあ」

ハレタに気づいたみたいだ。

「おっは、何かあったの？」

ハレタ父は、常に笑顔が絶えない。

綾崎家の父母と荒木家の父母は、
気楽な部分は共通しているかもしれない。

「いやあ」

我が息子にかわゆい彼女がいるって聞いてな？
父さん、嬉しかったぞ」

「なっ／＼／／」

そういえば、ヒナギクが来た頃に
ハレタ父はどこかに行ってたことを思い出す。

「ただ付き合うだけじゃなく、
男としてしっかり幸せにしてやるんだぞ」

ハレタ父はいつもと変わらない感じだが、
ハレタにその想いは伝わっていた。

「
… ああ / /
」

例えどんな父親であろうと、
自分にとってたった1人しかない。

その背中を追うのかは別にしても、
結局は大切なことをハレタは理解している。

それから、朝食や身支度をハレタは急いで済ませた。
そろそろヒナギクの家に行く時間である。

「ちょい、ヒナギクんとこ行ってくるー」

「行つてらっしゃい」

ハレタ以外の一同が声を揃えた。

その頃、ヒナギクは…

（早く来ないかなあ）

既に家の前に出ていた。

多少の寒さを感じていたが、
少しすると気にならなくなった。

「ヒナギク!!」

そう！

彼が来たからである。

「ごめんっ、待った？」

もちろん、ハレタな訳であるが。

「さっき出たところよ、

それより早く行こっ？」

せつかくのデートだし、
ヒナギクは時間を有効に使いたかった。

「うん！
頼むよ」

こうして、2人は街に繰り出していった。ヒナギクに連れられ、ハレタは色々なところを見てまわった。

「東京ってさすが、首都だな
某ねずみ王国もここにあんだろ？」

「え？

そのねずみ王国…千葉県にあるわよ」

「…マジで!？」

2人は、いい感じに街案内と言うデートを楽しんでいた。
このままいけば、ハッピーエンドだが
何のための伏線か不明になるのでそうもいかない。

歩いているのだがハレタは、
あるモノを目にすると立ち止まった。

ヒナギクがその目線を追った。

（バッティング…センター？）

ヒナギクは、何か話そうとしたが
ハレタが先に口を開いた。

「あいつは……」

その施設を目にしているのではなく、
中にいる人を見てハレタは表情を変えた。

そして駆け出す。

「ちょ…待って」

ヒナギクもよく分からなかったが、
ハレタを追い、駆け出した。

シュツ・・・

カキーン・・・

バッティングセンターだから当然、

ボールを打つときのバットの金属音が響いていた。

ハレタは、打席にいる1人の少年の近くで足が止まった。

ハレタが見ている少年は
気持ちよさそうに打ち込んでいた。

白球が出てこなくなったのを
見計らってハレタは少年を呼ぶ。

「仙波!!」

仙波と呼ばれた少年は、
すぐ声の方へ振り向いた。

すると…

「は……

ハレタ……!」

ハレタが知っていると同様、
仙波もハレタを知っている。

「久しぶりだなあ、ハレタ
元気してたか？」

ヒナギクからすれば随分慣れ慣れしいように見えた。

「っんなことより……」

お前……

野球できないんじゃない？」

ハレタは再会を喜んでいる少年とはまるで違った雰囲気を出していた。

「あの…えつと…」

状況が把握できないヒナギクは、
オロオロしていた。

「…ヒナギク、わりいけど…」

「え？ああ…
隣の待合室にいるから」

ヒナギクは、自分がいてもどうしようもないっぽいので
一旦その場から離れる。

ヒナギクがいなくなり、仙波が口を開いた。

「ハレタ、それ誰に聞いた？」

「お前が転校してすぐ、
監督が教えてくれた……」

「そか、知ってたか…」

にしても懐かしいな

まだ半年もたつてないのに、
バッテリー組んでたのが遙か昔に思えるよ…」

それから、長々と仙波は話を始めた。

同じ高校に通い、野球部を新設したこと。
さらには神奈川大会では
激戦区にも関わらず見事優勝したこと。
そしてハレタが絶対的エースとして
全試合を投げ抜いたこと。

「ハレタ君」

密かにヒナギクもドア越しに話を聞いていた。
悪い気はしたが、ハレタの部活のことに直結してると感じ
重要なことであるとも思って聞くことにした。

そして、ヒナギクの予想は的中していた。

「何で…

あの事は言わない？

「何でそんな楽しそうに話せるんだよ」

仙波の話を聞いていたハレタは、
何かに耐えれなくなつたようだ。

「確かに俺たちは強くなつてた。

甲子園でも本気で優勝できると思つてた。

…でも!!

あの勝負で、俺は…俺は……

お前の将来を、潰してしまったんだ!!」

時は戻り半年ほど前の、
ハレタ達の硬式野球部では…

「今日は、紅白戦だぞ
お前らぁ!」

主将だったハレタはその日
そう告げた。

「プレイボール！」

そして紅白戦開始。

試合内容は、

紅白どちらのピッチャーとも好投で8回まで
得点が動かなかった。

最終回である9回、その裏に均衡が破れかけた。

紅チーム先発ピッチャーのハレタは、
フォアボールからヒットも打たれ
ノーアウト満塁のピンチを招いた。

その後なんとか2奪三振で2アウトにするも

ネクストバッターはチームの主砲、仙波 竜也だった。

ハレタは、神経をすり減らしながら慎重にピッチングするも、
仙波も粘りなかなか勝負が着かなかった。

「
…ハア…ハア
」

ハレタは決めきれないことに対する苛立ち、
肉体的疲労で精神的にも疲れきっていた。

そして…

悪夢は起きた…

集中が途切れやけくそになってしまったままハレタは
ボールを放った。

ボタン

グシャッ

その直球が不幸にも仙波の肩に直撃した。
そのまま倒れて意識を失った。

「それから、お前は病院に運ばれた。

しかも…

「ご両親の急な転勤でもう一度会うことなく
お前はいなくなってしまった」

「医者には、

『この肩は治らないかもしれない、
野球は諦めた方がいい』

と言われたよ。

正直、俺は何をすればいいのかわからなくなった
野球がない人生なんて考えられなかった」

「俺は、仙波が野球をできなくなったと聞いたとき、
…もの凄い罪悪感に吞まれた…
将来プロ入りしていくような奴の才能を
俺が摘み取ってしまった

…だからケジメを附けるために俺も野球をやめた
それに、転校することも決まり、
ケジメもついたとおもっ……」

「野球をやめた…だと？」

長々と話しているところを遮った。

「ハレタ、お前が俺のことで
責任を感じてるのなら…」

野球やめんじゃねえよ！」

バシンッ

仙波がハレタを殴った！

「…っ」

ハレタは口元が切れて、よくあるような傷を負った。

「真実から目を背けんなよ、ハレタ」

仙波は彼なりにハレタをよく知っていて、
今ハレタにできることをしたつもりだ。

「でも！！俺は…」

また誰かを傷つけないんだ……」

まるで叫ぶような大声が
段々聞こえないくらい小さくなっていく。

「ハレタの考えは分かるよ、
でも、まだやれるだろ!？」

お前には俺ができない分頑張っ
て欲しいんだ

俺だって可能性がある限り野球人生を諦めねえよ

その証拠にバッティングだって思うようにまたできるしな」

「仙波……」

ハレタは心を動かされていた。
そして、仙波の話は進む。

「県大会決勝戦

3点ビハインドで最終回

みんな諦めかけてたけどお前だけは

目の前の甲子園を一瞬も諦めなかった

そして言っただよな、

『可能性はゼロじゃねえ！

止まらない限り、夢は俺らを見放さねえよ！
やれるだけやってやろうぜ！…！』

っ
てな

あの言葉聞いて俺たちは諦めなかった。

それに、今の俺があるのも
あの時のハレタ・・・

お前の言葉を忘れなかったからだよ」

（俺のおかげなんかじゃねえよ

俺らみんなだから、やれたんだ）

ハレタには、仙波の熱い想いがいっぱい伝わってきたようだ。

「仙波…」

あん時は悪かった

そして・・・

サンキューな！」

ハレタは、あの事故から
ずっとモヤモヤしていたものを
ようやく取り払った。

そして…

「あつ、いけねヒナギクが待ってる」

もう少し話をしていたかったけど、
ヒナギクを待たせるわけにもいかなかった。

「いいね、いいね」
昔っからモテモテ君はよ」

「
/
/
/

まあそろそろ行くわ
今度遊ぼうぜ」

「おうっ、彼女さんによろしく言っというてー」

最後は爽やかに2人は別れた。

後に、仙波はヒナギクとも仲良くなったり
ならなかったり…

「ごめん、待たせちゃった」

ハレタはペコツと頭を下げた。

「気にしないで、ハレタ君」

その…いつも通りの無邪気なハレタ君に戻ってよかった」

顔を上げたハレタに、

笑顔を見せた。

「ん／＼／／／
聞いてたんか」

ハレタはヒナギクの笑顔に
もちろんドキッとする。

「悪いとは思ってたんだけど…
すごく気になったから」

「ま、もう気にすることは何もないさ

まだ時間はあるし行くつぜ」

「うん／＼」

今度はハレタの笑顔がヒナギクに
ドンピシャしたのであったw

s i d e ハレタ

仙波、高校生活の間は野球部に加入はしないよ。

急にごめん。

すっげー大切に、大好きな人が俺にはいるんだ。
その人と、いろんな時間を共有して
たくさん思い出とか作りたいんだ。
野球も大事だけど、
それ以上に大事なんだ。

次に勝負する時は、最高の舞台だ。

絶対に上がってこいよ！

俺も絶対行くから！

夕方になり、今はいつもの分岐地点にいる。

「なあ、ヒナギク」

「どうしたの？」

ここで、ハレタはヒナギクを抱きしめた。

「……ほえ？／＼／＼」

ヒナギクは当然、赤面。

「……ずっと一緒……」

ずっと離さねえから！」

「……バカ……」

でも、約束なんだから／＼／＼／

2人で歩み続けることに何の迷いもない。

大好き！

そんな真っ直ぐな愛が2人を包み続ける。

決して、剥がれ落ちることのない愛が2人を

ずっと、永遠に…

第11話 ヒナの訪問（ハレタの憂鬱 2）（後書き）

無駄に長かったです。

あと、最後まで個人的に満足してます（笑）

感想・指摘・アドバイスがありましたら、
教えてください。

第12話 2月14日（前編）（前書き）

もうホワイトデーの時期ですが、
バレンタインデーのお話を投稿したいと思います。

12話ですw

第12話 2月14日（前編）

仙波竜也の一件から、数日後。

本日は、2月14日。

続に言う、バレンタインデーである。

男子は好きな子からもらえるか、
あるいは、何個もらえるか、
1つでももらえるかと、

目をキラキラさせている者が多数。

女子は、
本命チョコを持ってきている人も
義理のを持ってきた人と多数いた。

ヒナギクといえば・・・

もちろん1つだけ用意してある。

大好きの文字が描かれ、

ハート型のチョコだ。

ベタだと思ったが、一番しつくりきたらしい。

「男の子に初めてチョコ渡すなあ……」

ヒナギクは、チョコをあげたことがなかった。

初恋の相手が今の彼氏だからである。

むしろ、女子からたくさんもらい、
ホワイトデーにお返しするのが
毎年のように続いている。

だから、心から好きだと思える人に

チョコを渡せることを

喜んでいたりする。

「ハレタ君、どんな顔するんだろお」

ヒナギクは、そんな甘い妄想をしていたw

当のハレタは、バレンタインデーであることを知らず、のん気にヒナギクとの待ち合わせ場所にむかっていた。

この後、大変な目に遭うことをハレタは思いもしないであろう。

ヒナギクと合流し、

今は学校へ歩いていた。

「今日是一緒に帰る？」

「ん、だいたい一緒に帰ってんじゃない？」

この時、ハレタは今日が
どんな日であるか気づいてない事に
ヒナギクは気づいた。

「そうなんだけど…
一緒に帰る？」

「あ、ああ」

帰りにヒナギクは、チョコを渡そう！
と、思うのであった。

学院に着き、下足箱に
靴を入れようとしたハレタだが、

何かが入っていることに気がついた。

箱を開けて、中身を見ると・・・

『ハレタ君へ

直接渡すのは、ダメだと思ったから置いておきます。

会長さんがいるのは、分かってるけど、

受けとってください

組 ○○』

「……！」

（そいや、今日2月14日だったんだな）

ようやく、今日と言う日に気づいたようだ。

（にしても…

結構多くねえか…？）

詰まるだけ、詰め込んであつて
ビックリなハレタ。

教室に行ったら、行つたで…

「チヨコあるよー」

「俺、もうもらつたぜー！」

「くっそー、まだもらつてないよー」

・・・など、チヨコ絡みの発言が飛び交っていた。

ハレタは、その光景を見て苦笑いw

そして、席に着く。

「またチヨコ…」

机の中身を整理しようとするば、
チヨコを発見。

自分がこんなにもらってもいいのかと、
驚いていた。

ヒナギクはそれを見て少し不安に。

「ハレタ君、すごいもってるわね…」

「こんなに、チヨコもらったの初めてだよ

みんな、義理なのに優しいんだな」

聞く人によつては、嫌味に聞こえるであろう。

「……」

ヒナギクは、自分の好きな人がモテることが分かり

誰かに流れていかないか、

心配になった。

こんな時ハレタは、
すつごく鈍ちんなのでヒナギクの
不安に気づけなかった。

けど、浮かない表情のヒナギクを見て、

「心配すんな、俺はヒナギクじゃねと
嫌だから」

多分、自分のことだと察した。

「…うん／＼」

ハレタの素直な気持ち

ヒナギクに嬉しい限りだった。

昼休みになり、ハレタは1人弁当にがついていた。

女子は次が体育で、男子が保健だったので
教室に女ッ気1つなかった。

昼食を食べ終えたハレタは、
ゆっくりするつもりだった、のだが・・・

「あ、荒木君いたわ！」

「えっ、どこよ!？」

「荒木くん！」

「なんだ、なんだ!？」

ハレタは驚き、声の主の方を見た。

そこには、昼休みを利用して、

ハレタにチヨコを渡しに来た女子の軍団で賑わっていた。

なぜか教室には、ハレタしかいなく

ハレタはあつという間に

囲まれてしまう。

逃げようもないので、1つずつ受け取っていった。

全員にお礼を言って、女子も満足して退散し始めた。

最後の女子が、

出終わったと見ていたら、

「きゃっ!？」

なんと、ドアの淵に引っ掛かって転びそうになった。

ハレタは、反射的に体が動き、
後ろから抱き寄せる感じで
なんとか助けた。

善に急いだのだが、それが裏目に出ってしまった

「なに……」

してるの…?」

「ひ、ヒナギク!？」

ハレタはこの時、
女生徒との距離の近さを改めて感じた。

すぐに、離れて弁解を始めた。

「誤解しないでくれ！」

俺はただ、この子を助けただけなんだ……」

「でも、

顔……赤い……」

女生徒もハレタも顔が赤かった。

「だから、ちが……！」

君も何とか言ってくれ！」

そう言い、視線を女生徒へ。

「あの…、えつと…、

「ごめんなさい！」

なんと、その場から走り去ってしまった。

（やべえ…

このままじゃ、マズい…

なんか知んねえけど本能が
そう告げてら）

「ハレタ君なんて…

ハレタ君なんて…

もう知らない！！」

ヒナギクも泣きそうな顔で
その場から走り去った。

「ちょ…、

まっ……」

ハレタの声は届かず、

無情にも1人取り残されてしまった。

ヒナギクは、ハレタの信じがたい行動を
みてしまい、混乱していた。

予想外の展開にハレタも

どうしていいか分からなかったが、

とにかくチャイムが鳴ったので、

席に着いた。

幸い女子は体育でない。

考える時間は充分ある。

ここで何をすべきかしっかり考えることにした。

第12話 2月14日（前編）（後書き）

次話投稿をお楽しみに 笑

第13話 2月14日（後編）（前書き）

少し遅れました。

もう1ヶ月以上前のバレンタインの話ですが
見ていってください。

第13話 2月14日（後編）

ハレタは脳内でいろいろな考えを巡らせていた。

とにかく、誤解を解かねば……！！
このままだと口聞いて
もらえそうにねえぞ

1人の女子生徒を助けようと行動した結果、
女子生徒は助かったものの
ヒナギクにはあらぬ誤解をかけられ、
挙げ句の果てに
怒らせてしまった。

結局なにをすれば名誉挽回になるのか
わからないまま、チャイムは鳴ってしまった。

次第に女子が教室に戻ってきて
ヒナギクも帰ってきた。

「「……」」

2人は席に着いていたが
会話はなかった。

というより、ハレタは
必死にアピールしたが
ヒナギクは見向きもしなかった。

この気まずい空気のまま
放課後へ…

s i d e ヒナギク

今日は、ハレタ君を
喜ばせてあげたかっただけなのに……

あんな姿を見せられるなんて……

何か言おうとしてるけど
ちゃんと反省してもらわないと。

一緒に帰る約束をしていたが、
ヒナギクはこのまま教室にいてもしょうがないので
さっさと帰宅しようとした。

「何よ…」

もう謝りにもこないの…？」

1人ぼっちの教室で呟いていた。

教室から出ようと、
ドアを開けた。

「ハア…ハア…」

そこには息を切らしているハレタが。

ヒナギクは少し戸惑ったが、
ハレタが口を開いた。

「今日は悪かった。
俺の不覚な行動でヒナギクを
怒らせたなら、あやまる」

謝るために、ハレタは
校内中を探し回っていたのだ。

「
…」

しかし、ヒナギクは
ハレタと目を合わせようとしなかった。

そのヒナギクの態度に耐えかねたハレタは……

「な／／

いきなり何よ／／／／」

ヒナギクを抱きしめてしまった。

「いきなり、ごめん

けど、俺の話を聞いてくれよ……」

話声は弱々しいが、
しっかりと腕に力はこもっていた。

「ヒナギクに嫌われるのって…

俺にはつらいわ

何よりも…な」

ハレタは苦笑していた。

それでも言いたいことは言ったつもりだった。

「クス…」

ヒナギクはそのハレタを
みていて、怒っている自分が
バカバカしくなってきた。

「もう…」

どんなことがあっても、
その…

他の女の子とあんなことしちゃだめ」

そして、ハレタの背中に
手を添えた。

お互いの温もりを感じているだけで、
すべてがどうでもいいとさえ感じてしまったのだろうか。

2人は笑顔だった。

いつまでもこのままでは
帰れないので
かわりに手を繋いだ。

2人は玄関に行くと、
そこには昼の女子生徒がいた。

ヒナギクは少し身構えるのだが
女子生徒はヒナギクに話しかけた。

「桂さん、昼のことなんですけど…
ごめんなさい！」

私がドジ踏まなければ、
ゴカイされることはなかったんです」

ペコリと女子生徒は一礼した。

「いや、もういいのよ…
そのことは

…っというかドジって？」

女子生徒は、昼休みに
一人でいたハレタ訪れたことや、
自分が躓きかけたことを話した。

「なんだあw
そんなことだったの」

何だかんだ言って誤解は解けて
ハレタの優しさに触れることができ
自然とヒナギクの表情はほころんだ。

「んじゃ、帰ろうぜー」

約束通り2人は一緒に帰ることになった。
いつも通りの道のりを
いつも通り進んでいき、
バイバイ…、というところで、

「あー!!」

ヒナギクは突然声をあげた。

「おお??」

急に声をあげたヒナギクに
驚いた、ハレタ。

ヒナギクはカバンから
何かを取り出した。

それをハレタへ。

「はい、チョコレートだよ／＼」

ヒナギクは、照れたが
ハレタも以下同文だったw

「ありがとう／＼

…ヒナギクからはメチャ嬉しいや／＼／」

チョコレートを受け取り、
ハレタは満面の笑みを浮かべた。

ヒナギクもハレタの
無邪気な笑顔をみて
心が和らぐ。

…そして、帰宅したハレタが
中身を見てみると……

だいすき！

ハレタは思わずにやりとするのであった……

第13話 2月14日（後編）（後書き）

感想や、ご指摘など
お待ちしております！

第14話 ハムスター現る！（前書き）

遅くなりましたあw

できるだけ、早く更新できるように
頑張っていくので
よろしくお願いします。

それでは、14話です。

第14話 ハムスター現る！

「ただいまー」

ハレタが家に帰ってきた頃から始まる。

だが、まだ12時すぎくらいである。
今日は白皇学院の教育による会議所が行われるため、午前中に下校となった。

「時間あいちつたなあ」

家には一人で少し寂しさを感じる。

ハレタの父母といえは……

『…と、言うわけで温泉旅行に行ってくるわね』

『どーゆう訳だよ!』

『あーゆう訳だよ』

そして、

しばらく旅行へ行ってしまったw

(何て勝手な親なんだ・・・)

内心ハレタはやれやれとしていた。

ハレタ姉はまだ学校で夕方くらいまで帰ってこない。

とりあえず、腹が減ったのでご飯を食べることにした。

「本？」

ご飯を食べていると、机の上に
開かれたままの雑誌が置いてあるあことに気がついた。

興味を持ち、ハレタは手に取った。

「そーいえば、服とかあんま買いに行かねーもんな」

ハレタが取ったのはファッション誌だった。

服とかオシャレにはそれほど意識はしてないので金もそんなにかけたりしてはなかった。

でも、最近新しい服をあまり買っていないと思って、

「買い物でも行くか」

となつたのである。

ご飯を食べ終え、ハレタは某大型ショッピングモールへ、着替えてさっさと出かけた。

（さっさと出たけど、

1人じゃ寂しいかもなw）

誰か誘うつもりで

携帯のアドレス帳を開いた。

五十音順に見ていたら、

桂 ヒナギク

の所で手が止まった。

「ヒナギク急がしそうだな」

言葉とは裏腹にハレタは期待を持って、
ヒナギクにメールを送った。

・・・
♪

（メールだ、誰からかしら？）

ヒナギクはすぐにメールの確認をした。

「ハレタ君！？」

普段、ハレタからは
あまりメールがこないの
で少し驚き、嬉しくもあつたw

「服買いに行くんだけど、
もし暇だったら行かない？」

1人だと寂しいのでw

場所は。で今は近くの駅にいるよ

- - ハレタ - -
『

ヒナギクのテンションはマックスへw
そしてすぐに返信をした。

（お、返事きた）

着信音が鳴り、ハレタもメールの確認をした。

『お誘いありがとう（・ω・）／

丁度時間も空いてるし
今すぐ行くから、そこで待っていてください

- - ヒナギク - - 』

期待通りヒナギクが来てくれる
とゆうことでハレタの
テンションも上々w

ハレタはその場で少し待っていたら、
ヒナギクがやって来た。

「ごめんねー、待たせちゃった」

「急だったし、いいさ
それより行こうぜ！」

ヒナギクの手を取り、
ハレタは歩き出した。

突然のことに、ヒナギクは
顔を赤くした。

そんなことには、気づきもしないハレタだが。

でも、この自然とリードしてくれる
ハレタの姿をかつこいいと思ったのであった。

そして、某大型ショッピングモールへ
着いたのである。

「なあなあ、この服とかどう？」

「うん、似合ってるよ／＼」

「こっちのＴシャツとかも似合うと思うわ・・・」

２人は、まさに仲良しカップルと言わんばかりにデートを楽しんでいた。

そして、ハレタは当初の目的だった服を満足に買ったのであった。

少し疲れて、丁度

喫茶店があったので２人は入店した。

ジュースを注文して、

ようやく落ち着く2人。

「ヒナギクのおかげで、
いい買い物できたし楽しかった!!

サンキュー！」

ニコニコしているハレタに、
ヒナギクも自然と笑っていた。

「私も楽しい時間を過ごせてよかった」

「今度どっか行く時は、
遊園地なんかに行きてえな」

「ハレタ君と一緒になら
どこだって構わないわ／＼」

いい雰囲気をかもし出していた2人。
このままデートは進んでいくのかと
思ったがそうでもなかった。

「ヒナさん!!」

誰かがヒナギクを呼んだ。

ヒナギクは声が聞こえた方を向いた。

「歩!!」

そこには、ハムスター改め

西沢 歩の姿があった。

初登場のため、歩について説明をしよう。

とりあえず、普通の女の子である。

どこにでもいそうな感じで

語尾に”かな”を付けること以外は

これといって特徴もない。

ちなみにハヤテのことが好きだったりする。

「なんだか、バカにされてる気がするんだけど・・・」

そこは気にしなあいゝw

「ところで、ヒナさんはどうしてこんな所にいるのかな？」

歩は、ヒナギクに隣に座った。
ちなみに歩とヒナギクと仲がいい。

「えっと、お買い物・・・ね／＼」

ヒナギクはハレタを見ると
少し照れたようだった。

「へえゝ」

「って、そのお方さんとなのかな？」

そのお方とは無論、
ハレタのことである。

「うん／＼

歩には、まだ言ってなかったんだけど
彼はその・・・私の恋人なの／＼／＼」

ヒナギクは顔を赤くしたが、
歩は突然の事実に驚いていた。

「えっ・・・ええええ！」

ヒナさん、彼氏ができちゃったんですか!?

ってことは今はデートって訳だね」

「そう言うことになるわ」

と言ってハレタをヒナギクは見た。

（ハレタ君、自己紹介して）

そのアイコンタクトを理解し、
ハレタは口を開く。

「荒木 ハレタ・・・です。
以後よろしく！」

えーっと・・・」

「西沢 歩って言います。
歩って呼んでもらっていいので、
よろしくね、ハレタ君」

2人は堅いキャラでもないし
すぐに、打ち解けた。

「ところで、歩もどうしてここへ？」

「私もお買い物。
疲れたからこの喫茶店で休憩しようと
寄ってみたなら、ヒナさんたちとバッタリ！
って感じかな」

「ハヤテ君とはどう？」

バレンタイン以降何かあったの？」

（バレンタインの話で歩は出てきてないので、
分からない方は、原作を参照してくださいw）

「んっ・・・？」

歩さんってハヤテのこと好きなの？？」

ヒナギクの言葉を聞いて
ハレタは疑問に思った。

「・・・うん／＼／

前、同じ学校にいて

その時から好きだったんだ／＼」

「そうなんかあ・・・」

そして、いろんなことを話していると

時間はあっという間に過ぎていった。

「もう、いい時間だし
私はこれで。」

それでは、お2人さん」

歩は自分が頼んだ分の
代金を置いて、席を立った。

「それじゃ、俺らも帰ろうぜ」

残された2人も席を立った。

「今日はマジでサンキューな
んじゃ、今度は遊園地行こっか？」

ハレタは少し前のことを

思い出した。

「うん、楽しみにしてる！」

一緒に遊園地に行けることに
ヒナギクは期待に胸を膨らませた。

「決まりだな！」

「んじゃ、また明日な！」

そして、お買い物デートは幕を閉じたのであったw

第14話 ハムスター現る！（後書き）

ヒナギクがハヤテのことを

好きでも何でもないので、

お泊りイベントは発生してません。

ですから、ヒナギクと歩はまだ仲良くは
ないんですが、

初めから仲がよかった

とゆーことにしておきます。

勝手な話ですが、ご理解の程をお願いしますww

第15話 2人(part1) (前書き)

ヒナ祭り祭り編に突入です。

たぶん、4部くらいにわかれると思います。
原作にだいたい沿ってますが、
違うところも微妙にあります。

それでは、15話です。

「・・・夢、かぁ・・・」

もうすぐ誕生日だというのに、
ブルーになるヒナギク。

（お父さん・・・お母さん・・・）

脳内に忌まわしい過去が蘇る。
ただ、いつまでも過去のことを
引きずるわけにもいかない訳で・・・

ハレタとの、待ち合わせに
遅れないために仕度を始めた。

「おっヒナギク、おはよ！」

ハレタは、家のそばの待ち合わせ場所に
既に到着していた。

マフラーで口元を隠していて、
ポケットに手をつ突っ込んでいる

ハレタの姿に、ヒナギクは見惚れてしまう。

「ん？」

「どうかした？」

当然、ヒナギクの考えていることまでは
わからないのであるのだが。

「・・・何でもないわよ／＼／

おはよう／＼／＼

好きな人が、可愛く見えたり
格好良く見えたりするのは
思春期真っ只中の彼らに
あるものなのであろう。

落ち気味のヒナギクも
ハレタという大きな太陽のおかげで
今はそんなことが、気にならなかった。

所変わって、白皇学院生徒会室。

現在は放課後である。

今日は、生徒会の面々が揃っていた。

その訳は・・・

「えーっと、2日後にある

ヒナ祭り祭りの運営のことで・・・」

そう、白皇学院5つの伝統行事の1つである
ヒナ祭り祭りが時期に催されるからである。

（ヒナ祭り祭りについての、説明は省略させていただきます）

「会長、屋台についてのことなんですが・・・」
書記の春風千春さん。

「あ、それなら・・・」
副会長の霞 愛歌さん。

「なあ、私たちなぜここにいるんだ？」

「何でだろ」

「ヒナに連れてこられてしまったからな」

上から、

花菱、瀬川、朝風。

3 バカ・・・もとい、3人組である。

本来なら参加して当たり前の
生徒会の活動だが、

普段はサボっているので
面倒くさく感じているようだ。

「さすがに名門校だけに、
伝統行事も楽しそうだな」

「ええ、まあどれも楽しい
って訳でもないけれど」

最後に、ハレタヒナギクと
学院でもアツアツのお2人。

「こんな大規模な祭りがあつたなら
父さん、母さんも戻るのを

延期すりゃよかったのになあ」

温泉旅行から、帰ってきた
ハレタの両親は休暇も終わり
仕事のため、海外へ飛び立った。

「・・・・・・・・」

お父さん、お母さんという言葉で
ヒナギクは今朝のことを、思い出した。

s i d e ヒナギク

もう、過ぎていったことを
いつまでも気にしてたら
前には進めない。

そう、思っているのに
忘れることのできない自分もいる。

やっぱり・・・

好きだったからなの・・・？

ねえ・・・

どうすればいいの？

・・・ハレタ君

「ヒナギク？？」

「あ、ごめん・・・
どうしたの？」

ヒナギクは少しずつ、
活力がなくなっていた。

「もう終わりましたよ？」

「っつか、今日のヒナギクはらしくないぜ？
ボーっとしてるし、仕事も手に付いてないじゃん？」

ハレタは、他の人には
聞こえないよう小声で話した。

ヒナギクは、誰にも悟られないよう
気を遣っていたつもりだが
ハレタはそれを見破ったのだった。

「気にしないで、
少し頭痛がするだけよ」

「んー、大丈夫か？
んで、もう終わったぜ」

ヒナギクは慌てて、

「そろそろ、終わりにしましょう
あとは2日後の祭りを
楽しんでちょうだい」

これにて、仕事は終了。

それぞれはそれぞれの帰路へ。

「私って、わかりやすいのかな・・・？」

「・・・どーゆこと？」

唐突な質問にハレタはきょとした。

「考えてることが、
よくわかる？」

ヒナギクの、不十分な説明は
ハレタに伝わっている。

「別に、わかるって訳じゃ
ないんだけどよ、

なんか、ヒナギクのことだけは
伝わってくるって言うのか
何かくるんだよな」

『ヒナギクのことだけは』
その言葉が、ヒナギクには
嬉しい一言だった。

普段どおりの自分も、
ちよつと違った自分も
ハレタになら・・・

とヒナギクは思っていた。

「ハレタ君で・・・

すごく暖かい／＼」

「え???

手か???

「違うわよ／＼」

「んーつと

何が暖かいんだ???

「もぉー／／

教えてあげない」

自分に対することには
鈍いハレタなのであった・・・。

第15話 2人(part1) (後書き)

ヒナ祭り祭り編はなるべくまとまって
投稿していけるよう頑張ります。

第16話 2人(part2) (前書き)

結局は1ヶ月くらいかかってしまいました。

すみません(汗)

更に、この話は中途半端なデキでさらにすみません。
今日中に次話を投稿してしまうので
まとめて見てください。

第16話 2人(part2)

ヒナ祭り祭り当日。

ヒナギクは再びあの夢を見ていた。

「お父さん、お母さん！」

勢いよく彼女は起き上がった。
また、夢であることを確認する。

時刻は5時半。

祭りは夕方からであるため、
時間はすごく空いている。

もう1度寝ようかと思ったが、
眠くなくなって何かしようと思うのであった。

（たまには散歩してみるのもいいかも）

外を見るなり、そう思う。

まだ、誰も起きていない静かな家に

「行つてきます」

と小声でささやいた。

ただ、ブラブラ宛てもなく歩いているのだが、
気がつけば普通の一軒の家の前で足は止まっていた。

（ハレタ君・・・）

こんな早くに起きてないと思うが、
本心がここへ導いていた。

それに、朝から気分が悪い。

紛らわしいと言う、
一方的な思いもどこかに潜んでいた。

ちやうど、近づいていくと・・・

シュツ・・・

パシーン！

何かは分からないが音が聞こえてくる。

誰もいるはずないと思っていたから、

誰がいるか疑問に思う。

気になって、ヒナギクは足を運んだ。

パシーン！！

さらに音は大きくなる。

いけないと思ったが
ヒナギクは恐る恐る敷地内へ。

音源へ迫って行くと・・・

「ハレタ君!!」

そこにあっしたのは、ハレタの姿だった。

「えっ!？」

不意に声をかけられ、
ハレタは体をびくつかせる。

驚いたハレタだが、
ヒナギクを見て

「ヒナギク」

安心して、ヒナギクに近寄った。

ヒナギクもハレタに近づく。

「こんな朝早くから、何してるの？」

ごもつともな疑問だった。

「見てれば、わかると思っけど自主練。」

たまには、ボール投げとかねえと感覚忘れちゃうからさ」

ハレタの夢はプロ野球選手になることだ。
そのための努力は惜しまない。

それこそ前いた学校でずっと野球をしていれば
甲子園でまず、話題の１年生ルーキーとして
鮮烈デビューできただろう。

あとの２年間、甲子園に出場さえすれば、
プロ入りは保証されていたとか。

いろんな日々を乗り越え
１度は諦めた夢を彼はまた追い始めていた。

・・・まあ詳しい話しは別の話しで（笑）

「ヒナギクこそ、何でウチにいるんだ？」

額の汗を拭う。

「早起くに起きちゃったから、散歩してるだけよ」

うなされて、目が覚めたとはさすがに言えなかった。

「・・・そかつ」

ハレタは再び、ピッチングネットに向かってピッチングを始めた。

「……」

パシーーン……！……！

シュツ………

ヒナギクは、自然と言葉を発した。

「何が？」

ヒナギクの言葉が聞こえて、ハレタは質問をした。

「さっきから、その的の中心を外さないし
こんなに早いボール見た事なかったから・・・」

ワインドアップ（振りかぶって）で投げられる
速球が面白いほどコースに決まる。

さらに変化球もあると言うのだから
鬼に金棒だろう。

「んあ？／／

そんなことねえって／＼」

誉められて、照れたハレタ。

しばらく、ヒナギクはハレタを見ていた。
いつもと違う真剣な姿が
また格好よく見えていた。

「フー、少し休むか」

50球ほど投げて、休憩に入った。

自作のマウンドから降りて、
ピッチングネットの周辺に散らばる
ボールを集めた。

「私は、もう帰るわね」

そろそろ帰らないと、

家族が起床していたら心配するだろうと思っていたからだ。

「うん。」

あ、今日どうすつか？」

なんだか話が逸れていたが

今回のメインであるヒナ祭り祭りのことである。

「それがね、生徒会長は

早く行かないといけないみたいだから・・・」

申し訳なさそうにヒナギクは話した。

「マジかあ」

ま、しょうがねえって

つか、現地では会えるしょ」

「そう・・・だね／＼
んじゃ、また後で、ハレタ君／＼」

ヒナギクは自宅へ。

そして、時間は祭りへと進んでいく・・・。

第16話 2人(part2) (後書き)

別のエピソードの伏線みたいな
感じになってしまいました。

次から祭りに入っていくので
見ちゃってください。

第17話 2人(part3)

「姉ちゃん、もう行くわー」

「わかったあ、行つてらっしゃいー」

ハレタは自身の姉に伝えると、
胸を躍らせながら家を出た。

すごい規模の祭りと聞いていたので楽しみにしていたのだ。

ガヤガヤ・・・

学院に着いてみると、期待通りすごい人ばかりで
屋台もずらりと並んでいた。

だが、何より楽しそうな雰囲気だった。

「すげえ・・・」

思わず声が出てしまうほどの凄さだった。

「当たり前だよ。」

なんせ白皇だからな」

答えになってない返答をしたのは・・・

「花菱！」

何だか久しぶりな気がするな」

そう、花菱美希である。

「いつも学院で見かけるじゃないか・・・」

美希は、ハアとため息をついた。

「そいや、瀬川と朝風の姿が見えないぞ？」

いつもなら、3人でセツトなのでハレタは違和感を覚えた。

「ああ、あの2人なら、

『屋台を制覇するぞー!!』

とか言って、旅立ったよ。

それより、ヒナはどうした？

誕生日なのに、一緒にいてあげないのか？」

美希の一言でハレタの表情が一変。

「ヒナギクは……って、誕生日！？」

今日ヒナギクの誕生日なのか！？」

ハレタは、びっくり仰天していたようだった。

「まさか、知らなかったのか？」

3月3日はヒナの誕生日で間違いないぞ」

美希はやれやれと言った顔をしていた。

「知らねえよ・・・」

今聞かされたからな。

ヒナギクは何も言ってこなかったし・・・」

「だったら、早いうちにおめでとつを言ってあげるんだぞ。」

もうすぐパーティーもあるから」

そう言って、美希はさつさと人ごみの中へ。

（俺もこうしちゃおれん、ヒナギクを探しに行くか

でも、今日のヒナギクを見ている限り
自分にお誕生日に気がついてないのか・・・？

なんか、ひっかかるような・・・)

ヒナギクに、どこにいるかのメールを送って
ハレタは走り出した。

一方の、ヒナギクは・・・。

「お母さん、もう1つアイス買ってー」

「ええー、またあ？
しょうがないわねー」

すみませーん、そのアイスを・・・」

小さい子とお母さんの和気あいあいな所を見ていたら、
自然と胸が苦しくなっていた。

（何で、モヤモヤしてるの・・・私は

引きずってもしょうがないのに・・・

最近はこのことばかり、考えてもしょうがないのに）

ヒナギクは過去にあったことで
相当病んでいた。

それこそ、ハレタさえ忘れてしまっくらいに。

携帯が鳴っていたことにも気づかず、ヒナギクはただ歩いていた。

「やっと、見つけた」

途方に暮れていたヒナギクを見つけ出した人物がいた。

「美希、どうしたの？」

ヒナギクを見つけたのは、ハレタではなく
なんと美希だった。

「ちょっと、私についてきてくれ」

ヒナギクのことは気にせず、とぼとぼ歩き始めた。

「ちょ……待ちなさいよ?」

少し歩いて、美希は講堂の前で足を止めた。

「じゃあ、入ってくれ」

と言って、強引にヒナギクの後ろに回り中へ。

パン！！

パン！！！！

「お誕生日おめでとう（いげんまつ）……」

「な・・・何!？」

突然の大歓声でヒナギクはあ然としていた。

「何って、ヒナの誕生日会だよ」

大量の拍手と歓声、これでようやくヒナギクは今日が何かを把握。

(そういえば……)

今日誕生日だったわね)

「ありがとう、みんな。」

私なんかのためにこんな派手な用意までしてくれて」

気分が乗らないヒナギクは、偽りの笑いを見せた。

「それはそれとして、
ハレタ君にはプレゼントを貰ったか？」

「え、まだ・・・だけど。」

「言うか、会ってない・・・」

今のヒナギクは空っぽだった。
自分でもわからないくらいに・・・

「まったく・・・」

「まだ見つけてなかったのか」

美希はここでもため息をついた。

「ハレタ君、私を探してる・・・？」

美希のぼやきが聞こえたようで、
ヒナギクはそう捉える。

「そうだが・・・？」

「・・・私

ハレタ君のところに行ってくる!」

「ヒナ・・・」

ヒナギクも走り出した。

side

ヒナギク

私は何を考えているんだろう。

大好きな人が私を探し続けてくれているのに、
他のことに気を取られて、忘れていたなんて・・・

私、ダメだな・・・

どうしても、前を向くことができないヒナギク。

彼女を変えることができる人がいるなら、

彼しかない！

走れ、ハレタ！！

第17話 2人(part3) (後書き)

走れ、メ。スみたいになっちゃいましたが
どうでしたか？笑

感想を随時待ってます。

第18話 2人(part4) (前書き)

しばらくぶりの更新ですいません(泣)

少しずつ更新ペース上げれるように
頑張っていきます!!

それでは18話です。

第18話 2人(part4)

(ハア・・・ハア・・・)

どこにいたよ・・・ヒナギク)

このままじゃおめでとうも言えずに祭りが終わるかもしれない。

ハレタは何も言えないのだけは避けたかった。
て言うか、ありえなかった。

とにかくヒナギクを探し、走った。

「あ、ハレタ君・・・どうしたんですか？
息が上がるほど走って」

ハレタは誰かに、引き止められた。

「おう、ハヤテ。

．．．つかヒナギク見なかったか？」

「え、ヒナギクさんは．．．
見てないですよ？」

「ですよ、お嬢様」

ハヤテは隣にいたナギに確認をとった。

「ああ、見てないぞ？」

ハレタは、少しがっかりしたが・・・

「そっか、わりい手間取らせた」

と言って、また走った。

その少し先にメイドさんが・・・！

「あの、えっと・・・メイドさん！」

メイドさんとはマリアのことである。
顔は覚えていたが、名前が出てこなかったのである。

「・・・はい？」

あなたは、ハレタ君！」

マリアはハレタとの認識が一回しかないにも関わらず

ハレタをよく覚えていた。

「あ、はい。」

それより急ですみませんが、ヒナギク見ませんでしたか？」

名前を聞くことより、今はそっちの方が重要だったようだ。
マリアは少しむっとしたがハレタの質問に答えた。

「ヒナギクさんは……見てないですよ」

「そう……ですか……」

ありがとうございました」

またもがっかりだがハレタは走り出す。

「あ、ちょ・・・」

マリアの声はハレタに届いてなかった。

それで、ハレタだが・・・

（あそこなら・・・いるかもしれない・・・!!）

ハレタは直感でそこにヒナギクがいる気がした。

学院内に入り、エレベーターを目指した。

ずばり、ハレタは生徒会室に行こうとしていた。

「ヒナギク!!」

ハレタは勢いよく扉を開けた。

・・・が、そこにヒナギクの姿はなかった。

誰もいないところにいてもしょうがないので、
ハレタは再び探しに行こうと振り返った。

振り返った瞬間扉が開いた。

「・・・ハレタ君!？」

「ヒナギク!!」

思わぬ形で2人は会うことができたのだった。
お互いにそこで、肩の力が抜けて
ソファに向かい合って腰掛けた。

しばし沈黙が続き、ヒナギクが口を開きそうにないな
と思ってハレタが口を開いた。

「最近さ・・・
なんかあつたろ？」

おめでとうよりも先に口から出てきた言葉だった。

「・・・え、なんで？」

急な質問にヒナギクは戸惑ってしまった。

「いや、ここ数日ずとらしくねえから・・・」

根拠はないけど、様子が違うように見えるんだ」

「
・
・
・
・
・
・
」

ヒナギクは黙って、難しい顔をした。

（ハレタ君には言うべきだよね・・・？）

暗闇のなかに隠れた表情を月明かりが照らします。

ハレタは、このヒナギクの表情から何かあるなど言う自身が確信に変わった。

そして、ヒナギクが口を開く。

「最近、みんなが少し羨ましく見えるの・・・」

重々しいオーラをヒナギクを放っていた。

「・・・？」

抽象的過ぎて、まだこの段階では理解ができていないハレタ。

「お父さんとお母さんが家庭にいるのは普通だよ
普通だけど、それって幸せな事だと思うの」

「まあ、当たり前なことって幸せな事でもあるからな？」

「うん。」

叱ってくれるのも、誉めてくれるのも

お父さんやお母さんは子供を心から大事にして大切に育ててく
てるからだよね」

「どうしてそんなことを今・・・？」

やはりハレタには見えてこない。

ヒナギクが抱えるもの。

過去のトラウマ。

「ヒナギクにだって、素敵なご両親がいるじゃん？」

「うん。」

でも・・・、あの親は本当の親ではないから・・・。」

「……………」

ハレタは何と言えればいいかわからなかった。
ヒナギクは話を続けた。

「私の本当の両親はね、私の6歳の誕生日前に、
8千万の借金を子供に押しつけて、いなくなってしまったの」

「・・・・・・・・・・!？」

概念的理解にとどまっていたが、少しずつハレタは
ヒナギクの気持ちと状況を把握しつつあった。

「まあ、借金はお姉ちゃんがどうにかしてくれたんだけど・・・その後、引きとってくれたのが今の桂家の人たち。私のお義父さんはお姉ちゃんの小学校の先生だった人よ。その時、ずっとお姉ちゃんを気にかけてくれてて・・・」

「ここで、ハレタは聞きたい事があった。

「本当のお母さんと、今のお義母さん・・・どっちが好きなの？」

「どっちも・・・どっちも大好きよ！！
でも、思い出すと胸が苦しくなって・・・」

人には言いたくない事だがヒナギクはハレタに必死に話した。
ハレタは真剣にヒナギクと向き合っていた。

「なあ、このテラスから見える絶景。
ヒナギクは見た事があるか？」

ヒナギクの弱点を知っていたので、答えはわかりきっているのだが。

「あるわけないわよ・・・、知ってるでしょ？
私、高い所は苦手だから」

弱々しく答えるヒナギク。

返答を聞いて、ハレタは立ち上がった。

「ちょっときてくれ。」

ヒナギクの手を引っ張りテラスへ。

「え！？あ！！
ちよつと、ダメよ！！テラスは」

（ だいぶ原作に沿ってるが気にしなゝい ）

「いいから、いいから俺がしっかり手握ってる」

ハレタは空いてるもう一方の手を
ヒナギクの肩にのせて自分の方へ引き寄せた。

ヒナギクは握られていた手に力を込める。

そして・・・

「すごい・・・!!」

高所である恐怖よりも、この美しい景色に感動したことが勝った。

「俺は、親を失ったことなんてないし
ヒナギクのいたみを理解してやることもできない。」

それでも、俺にだってできることはある。
俺がその傷口を塞ぐ。
俺がヒナギクを支える」

口だけじゃない、ハレタの強い意志が伝わる。

「でも！！スキになるといなくなってしまっ気がする・・・！！」

どうしようもできない過去のトラウマがここでヒナギクを襲う。

s i d e 〵ハレタ〵

今、俺がヒナギクにしてやれることはなんだ？

『俺はいなくならないよ！』

いや・・・違う、こんな薄っぺらな言葉じゃ何も伝わらない。
ただ、笑顔でいて欲しいんだ・・・

「・・・そういえば、誕生日おめでとう。
ヒナギク」

ハレタはこの景色から目を離さなかった。

「・・・え？」

確かに誕生日だったが、ヒナギクはこの空気からおめでとうを言われあ然とした。

だがハレタは、淡々と話し続ける。

「プレゼント……、あげなきゃな」

そして、次の瞬間……!!

「・・・!!!!!!//」

ヒナギクは最初、何が起きたか分からなかった。

自分の唇とハレタの唇。
それが今は触れ合っていた。

ハレタのこの行動にはびっくりしたが、
同時にヒナギクはハレタから伝わってくるものがあった。

言葉で言い表せないような何か
心からの愛情だった。

その時、ヒナギクは数秒が数分にも感じた。

「これが……
俺の想いだ!!」

口では何も言っていないが、ヒナギクはそれを理解していた。

その瞬間ヒナギクの何かが変わった。

「……大好きだよ／＼／
いっぱい……いっぱい迷惑かけちゃうけど
私もこれからもずっと一緒にいたいです／＼／」

ハレタもヒナギクもかなり顔が赤くなっていた。
だが、ヒナギクの心は既に晴れていた。

ハレタは思わずヒナギクを抱き締めた。
今だけは、自分の気持ちに正直な行動をとった。

夜空に浮かぶ月。
夜の闇を輝かせる月は、
2人を輝かせた。

しばらくの間その光は消える事を知らなかった。

「それじゃあ、会場に戻ろっか？」

「だな！

まだ、2人で回ってないしな／＼」

こうして、当初の予定通り2人で祭りを楽しむため
再び人混みの中へ入っていくのであった。

第18話 2人(part4) (後書き)

まだ、ヒナ祭り祭り編は終わってません。
次話でこのエピソードは完結です。

第19話 白皇なおどり（前書き）

ずいぶん遅れた更新となっていました（泣）
入試等終わり、だいぶ落ち着いたので
また再開したいと思います！

前話（半年前ですが・・・）からの続きです！！
それではごらんください。

第19話 白皇なおどり

生徒会室を出た2人は、思う存分に祭りをエンジョイしていた。

「わぁー、あの人形可愛い／＼」

ヒナギクは射的台の上に並べられている、クマのぬいぐるみを指した。

「こーゆー時は男見せねえとな」

ハレタは腕まくりをして、射的のおっちゃんに挑戦料を払った。

「あ・・・いいのにー」

と、ヒナギクは呟いたが、
実際はハレタがとってくれないか期待していたのであった。

「3発しか入ってないから、慎重にな」

そう言われた後、ハレタは射的を受けとった。

クマを狙って放った一発目だったが、
見事に外れ、二発目も近くだったが外れてしまった。

「案外、難しいな」

ハレタは一度ヒナギクの方を見た。

(…………男見せねえとな)

深呼吸をして、もう一度狙いを澄ました。

・・・パンッ!!

「やるじゃねえか、あんちゃん
ほら、もってけ泥棒！」

ハレタは見事にクマに命中させたのだった。

ぬいぐるみを渡されて、

「っしゃあ!!」

と、無邪気にハレタは喜んだ。

「すごい／＼」

そんなハレタを見ていて、ヒナギクの頬も緩む。
ほら、と手渡されさらに嬉しくなった。

「なんや、なんや」

えらいアツアツのお2人さんがいるやないか」

突如、2人に向けられた声。その声の主とは……

「関西弁にその容姿、あんたは・・・
お笑い好きのあの子か!!」

「ちゃうわー、ボケてんのか!?
咲夜や、愛沢咲夜」

今のところ唯一の関西っ子の咲夜であった。

「あなたは、ナギの幼馴染の・・・」

ヒナギクも彼女を知っていた。

「そや、以後おおきに」

「ところで咲夜、何故ここに？・・・とは聞かないけど1人か？」

祭りなのだから外部の人がいてもおかしくはない。

「それがなあ、伊澄さんとワタルと来とつたんやけど・・・、はぐれてしまったさかい」

13歳にもなって迷子になってしまったことを、恥じていたようだ。

「なら、探しましょ」

ヒナギクは、あっさりと言った。

「そうだな、放っておく訳にもいかねえもんな」

ハレタもヒナギクと同意見で、さっさと人探しに行くのであった。

「えらい早い展開やなあ、まあ感謝しとるで」

携帯も繋がらずさすがに困っていたので、
咲夜は2人と合流できて心強かった。

会場の外側から地道に回って行き、今は中央付近のあたりだった。
中央付近では、男子が女子を誘って社交ダンスを踊る場所だ。

「見当たらんなあ・・・」

咲夜はため息をついたが、

「いるぞ、ほら」

ハレタが見つけたようで、伊澄とワタルを指差した。

あ！と咲夜から自然と声が漏れて、そのまま走り寄っていった。

「……って何してんのや」

踊ろうとしているのだが、踊れず女々しい様子の2人がそこにいた。

一応説明するがワタルは伊澄のことを好きなのである。

だが、思いは伝えられないままである。

ワタルは一途だがやっぱりまだ、子供だから・・・

「うるせー／＼誰が子供だ!!」

・・・とりあえず、咲夜は伊澄とワタルと合流することができた。

「ほな、2人ともありがとーな

ウチらは少し休憩でもしてくるわ」

こうして、2人きりとなった。
周囲の人々は踊っている。

とすれば・・・

「俺らも、踊らない？」

ハレタは、ヒナギクを誘ったのである。

「そうね／＼」

手を取り合い、音楽に合わせて踊るだけ。

ハレタは踊り方を知らなかったので、ヒナギクに合わせていた。

しかし、案外それが様になっていたりしたので、夢中に踊り続けた。

少しの間踊った後、2人は一旦会場から外れた静かな場所へ移動した。

「だいぶ時間経ったなあ」

現在は20時過ぎ。
なんだかんだで時間はあっという間に過ぎていった。

「そうね、でもまだ最後のイベントがあるわ」

「えっと・・・」

『白皇なおどり』

だっけ・・・？」

白皇なおどりとは、祭りの締めに行われる

白皇学院風の盆踊りを踊るといったものである。

まあ夏じゃないが、気にする事はないのである。

「そうそう、ハレタ君は踊る?？」

「まあ、楽しそうだし踊るよ。

ヒナギクも踊るか?」

せっかくの祭りだし全部楽しもうと
当初からハレタは思っていた。

「うん!!」

・・・私、模範生として中央で踊らなければならないの」

ハレタは、ヒナギクの近くにいることはできないと思ったが、

「なら、ヒナギクの踊りじっくり見ながら踊るわ」

逆に見る事はできると思ったのだった。

「もぉー／＼恥ずかしいじゃない／＼／＼」

そんな感じでラブラブだった2人。

そして、場面は移り・・・

(やつべ・・・、すんげえ楽しい!!)

ハレタは心の中でそう思いながら、おどりを楽しんでいた。

「なあ・・・泉、理沙。

あんなに楽しそうな顔をする子供がここにいるとはな」

「ああ、まさかこんな一面があつたとは」

「にははっ」

上から、花菱美希、朝風理沙、瀬川泉の3人組である。

・・・・ちなみに、この3人がハレタを動画に収めていたのは秘密である。

（ハレタ君ったら、あんなにはしゃいで・・・

でもすごく笑顔だなあ）

あまりにも無邪気なハレタをヒナギクはそつと見守っていた。

そして、にぎやかな祭りは終わり、学院は静けさを取り戻す。

「なんだかんだいって、結構楽しかったな」

ハレタはそれはもう満足気だった。

「クスクス・・・、そうね」

ニコニコのハレタにヒナギクもニコニコだった。

「また、来年のヒナ祭り祭りも楽しみだな。
来年はちゃんとしたプレゼントあげるかな!!」

「うん!! 約束だよ／＼」

キスをしたことを思い出したのか、ヒナギクの頬が少し赤らむ。

今日の出来事は、ヒナギクにとって最高のバースデーとなった。

親を失った悲しみより、大切な人に愛されていることの方が

彼女にとって大きかったのだ。

愛される幸せを改めて実感し、その幸せを離したくないと彼女は思うのであった。

「・・・さ、今から会場の片付けしましょ」

「な！？マジかよおおおおー」

二人の夜はまだまだ続くのであった。

第19話 白皇なおどり（後書き）

できる時はオチをつけていきたいなあ
っと思う今日この頃です（笑）
できれば、感想頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5923i/>

ヒナギク×オリキャラ 物語

2011年10月6日03時31分発行